

自己分析から着想した「リアル・ファンタジー」小説

「桜色の夢」

塩内 美波

(君塚 洋一ゼミ)

1. はじめに
2. タイトルの意味
3. 設定
4. あらすじ
5. 最後に

1. はじめに

この小説は、就職活動をきっかけに自己分析をしたことで生まれたものだ。大学時代に頑張ったことを聞かれた時、アルバイトやサークル活動について話す人が多いだろうが、私はどちらも行っていない。大学時代に頑張ったことで答えられるのはゼミの活動だけだった。実際に一番頑張ったことなので嘘ではないし語ることもできる。けれどやはりアルバイトやサークル活動を行っていれば話すことの幅が広がったのではないかと思った。その時にたくさんさんの時間があつたのに、と感じた。それは夏休みなどの長期休暇やゼミの活動がない時だ。けれどその時間は家に籠り、好きなことをする日々だった。それはそれで楽しかったから良いと思う。だが思い返すと多くの時間をなにもせずに過ごしてしまったように感じた。

ちょうどその時、卒業論文のテーマを考えなくてはならなかった。私は提出するものを論文ではなく、中学の頃からの趣味である小説にしようと考えしており、そのテーマについて試行錯誤していた。そして浮かんだのが「時間を大切に」というものだった。

小説は幾つか書いてきたものの、長編小説は初めてであり、そのために初めてプロットを書いた。今まで人に見せるのが恥ずかしくて誰にも見せなかった私の小説を、初めて先生やゼミの仲間を読んでもらって意見をもらった。最初は見せることに緊張していたけれど、プロットを見てもらう度に良い作品になっていくのが感じられて、それが嬉しかった。このようにして、小説は楽しみながら考えることができた。だがそれよりも頭を抱えることになったのがタイトルだった。

2. タイトルの意味

メインタイトルの前半は前述したとおり、自己分析をきっかけにして生まれたもので「自己分析から着想した——」とつけた。後半にある「リアル・ファンタジー」小説に関しては、私の造語だ。この世界には様々なジャンルの小説が存在しているが、その中で「リアル・ファンタジー」というジャンルを私は聞いたことがない。それでいて今回の小説にはぴたりと当てはまると感じた。

このタイトルは、小説に出てくる世界が二つあることから生まれた。小説の設定については後述するが、この小説には「天界」と呼ばれる架空の世界と、私たちが暮らす現実世界を指す「現」と呼ばれる世界が登場する。

小説には、書籍化されたものから小説投稿サイトなどで人々に読まれることを待っているものまで様々なものがある。その中でもファンタジー小説は、自分で好きな世界を構築できることから小説を書く際には

楽しいし（新たに構築する大変さもあるが）、読む時には自分にはなかった新たな世界を知ることができるのでとても楽しい。私も昔からファンタジー小説は、書くのも読むのも好きだ。その中でも細かく分類することができるのだが、主人公が異世界で生活をする作風のものになると二つに分類できると考えている。

一つは、主人公が元々ファンタジー世界の生まれで、最初からその世界で生活をするもの。もう一つは、主人公が現実世界の生まれで、序盤でとあるきっかけがありファンタジー世界に行くというものだ。このジャンルで最近見ることが多いのは「転生もの」と呼ばれるものだろう。現実世界で事故などで亡くなった主人公がファンタジー世界に転生し、そこで新たな生活を始めるというものだ。その時に現実世界で主人公が持っていた物も一緒に転生することがあるので、携帯電話などが異世界で役に立つ場面も度々見られる。

けれど私の考えた小説は少し違う。主人公は現実世界の生まれで、あるきっかけでファンタジー世界へと向かうことになる。けれど、主人公には現実世界へと戻る方法が用意されており、戻ってくるができるのだ。その後は現実世界で友人と過ごしたり、ファンタジー世界に行つてそこで知り合った人と過ごしたり、と二つの世界を行き来しながら有意義な生活を送る。その設定こそがテーマである「時間」にも繋がってくるのだが、これはタイトルにしたら面白いのではないかと思つたので「リアル・ファンタジー」という言葉を独自に作り表現することにした。次にサブタイトルの「桜色の夢」について説明する。このタイトルを考えるにあたって、私はいくつも小説の中に登場する言葉を書き出した。そこに多かったのが主人公のファンタジー世界に対する思いだった。主人公は小説の最後にファンタジー世界から離れ、現実世界だけで生きていくことを決意する。主人公にとってファンタジー世界で過ごした日々も本物だった。けれど主人公は作中でファンタジー世界のことを「夢」と表現している。それは主人公の、もうファンタジー世界には行かない決意を表した言葉でもあった。それが私にとって印象的でタイトルに「夢」を使うことにした。「桜色」は、主人公が作中でファンタジー世界に行くときに着ていた着物の色だ。「夢」の世界で一番主人公の近くに

あったのが「桜色」で、主人公にとって大切なものだと考えたため「桜色の夢」というタイトルをつけた。

3. 設定

ここでは小説に大事な設定について書いていく。世界観と登場人物に分けて紹介する。

まずは世界観について。

・天界（てんかい）……この小説のファンタジー世界のこと。神と鬼が暮らす世界。ここには天界と現を繋ぐ扉がある。神によって持ちこまれた現のものがあちこちに存在しており、人間の主人公にとって馴染み深いものもある。時間の流れ方が現と異なり、だいたい3分の1くらい速さ。そのため天界にいる間に現では早く時間が過ぎてしまう。

・現（うつつ）……この小説の現実世界のこと。主人公やその友人が暮らす世界。ここには現と天界を繋ぐ鳥居がいくつもあつた。その一つを通して主人公は天界へと行くことになる。

・神（かみ）……天界に暮らす種族の一つ。神は天界から現に行くことができる。

・鬼（おに）……天界に暮らす種族の一つ。鬼は天界から現に行くことができない。

次に登場人物について。

・四宮古都香（しのみやことか）……本作の主人公。昔は京都に住んでいたが小学四年生の頃に東京に引っ越し、大学入学を機に京都へと戻ってきた。昔の出来事がきっかけで鳥居を見ることができるようになり、天界へと行くことができる。

・紫鬼（しき）……天界で出会った鬼の三兄弟の長男。古都香にとつてもお兄さんのような存在。

・紫楓（しほう）……天界で出会った鬼の三兄弟の次男。古都香にとつて頼れる存在。

・紫苑(しおん)……天界で出会った鬼の三兄弟の三男。古都香にとつて弟のような存在で、古都香にとても懐いている。

・玲音(れいん)……天界で出会った鬼の女性。古都香に着物をくれたりと、かつこいのお姉さんのような存在。

・陽(はる)……天界で出会った神の男の子。古都香が鳥居を見ることでできるようになったきつかけ。

・碎禍(さいか)……天界で出会った神の男性で、本作では敵の立ち位置を担う。ある思いを叶えるため古都香を誘拐することになる。

・片桐奏人(かたぎりかなと)……古都香の幼馴染み。大学で再会し、それからはよく一緒にいる。

・三津木裕也(みつぎひろや)……同じ大学で奏人に紹介されて出会った。よく一緒に行動を共にする。

・小鳥遊夏姫(たかなしなつき)……同じ大学で講義が一緒になり知り合った古都香の友人。よく一緒に行動する。

・九条有紗(くじょうありさ)……同じ大学で、裕也が最初に知り合っただけで仲良くなった。古都香がいつもいるメンバーの中では最後に加わったメンバー。

これらの設定をふまえて、次はあらすじを書いていきたいと思う。

4. あらすじ

全8章の本作を、1つずつ紹介する。

《1章 帰郷》

古都香は入学したばかりの大学で奏人と再会する。そこで思い出話で盛り上がりつつあると、かつて古都香が山で滑落したという話を聞く。しかし古都香はそのことについて全く覚えていない。その場所に久しぶりに行ってみることにになり、古都香と奏人は休日の土曜日に山へと向かう。奏人に落ちた場所を教えてもらった古都香がそこを見ると、そこには不自然に建つ鳥居があった。しかし奏人にはそれが見えていない。不思議

に思った古都香は次の日(日曜日)に山に向かい、鳥居をもう一度発見。興味を持った古都香は鳥居を潜ってみることにする。

《2章 天界》

潜ったそこはまるで平安時代の街のような場所だった。けれど電気が使われていたりと不自然な世界。そこにいる人々は全員着物を着ており、早く帰りたくなった古都香はここに来るときに使ったであろう鳥居をすくなく聞きこみをする。しかしここには鳥居がないと言われてしまう。どうしたら帰れるのかもわからない古都香は歩き続けていると、一人の男性に声を掛けられる。紫苑と名乗った彼に連れられて彼の家に行くこと、そこで彼の兄である紫楓と紫鬼に出会う。三人から天界・現・神・鬼について教えてもらい、洋服では目立つだろうと彼らの知り合いである玲音から着物を貰う。その着物を着て連れて行ってもらったのは天界と現を繋ぐ扉だった。そこを通った古都香は無事に現に戻ることができた。

《3章 夢現》

けれど現に戻って来た古都香には不思議なことがあった。日曜日に天界に向かって現に戻ってくると火曜日になっていたのだ。てっきり古都香は月曜日だと思っていたから、時間の流れ方に驚いた。その後、古都香は奏人や夏姫、裕也と共に遊びに出掛け、そこで和風の小物を見つけた。紫鬼たちのことを思い出した古都香はもう一度天界へと行くことに。そこで再会した紫鬼に、彼らが神や鬼から依頼を受けて生活していることを知る。そこで古都香も彼が現在受けている女の子探しの依頼を手伝うことに。無事に女の子を見つけた古都香は、紫楓と紫苑と一緒に天界を楽しむのだった。

《4章 出逢》

現では有紗と出合い、天界では陽と出会った古都香。有紗とは有紗のバイト先に行ったり有紗の行きつけの店に行き親睦を深める。天界では陽に声を掛けられたことで、彼と幼い頃に出会っていたことを知る。そ

して彼が、古都香が山で滑落した現場に居合わせたこと、その時怪我の治療をしてくれたこと、それが原因で古都香の中にだけその時の記憶がなくなっていることなどを知る。陽と昔の話をして親しくなった古都香は街で紫鬼たちと出会い、陽を紹介する。

《5章 開始》

春休みが終わる頃、古都香は裕也から旅行に誘われる。古都香はすぐに行くことを決め、旅行の前日には紫鬼たちに旅行に行くことを伝えるために天界を訪れた。しかし天界に辿り着いた時、古都香は誰かに襲われる。目を覚ました古都香の前に現れたのが碎禍だった。碎禍は紫鬼と戦うために古都香を誘拐したと語る。碎禍は古都香にはなにもしないことを約束し、古都香はその言葉通り快適な生活を送る。その中で古都香は碎禍の過去と復讐の物語を聞くことになる。けれど怖くなった古都香は途中で話を止めてしまう。

現では友人が旅行に行こうとしていたが古都香と連絡が取れず이었다。相談した結果、携帯にメッセージを残して先に向かうことになる。そんな彼らにも次第に変化が現れ始めるのだった。

その頃、紫鬼は自警団（天界の警察的存在）から碎禍の捜索を頼まれていた。紫鬼は自警団と共に碎禍の捜索を開始する。

《6章 決着》

捜索していたものの碎禍を見つけれない紫鬼の元に碎禍が自ら現れる。碎禍は紫鬼に自分と古都香の居場所を伝えると去っていく。古都香の元に戻った碎禍は紫鬼に会ってきたことを伝える。紫鬼の名前を聞いて嬉しそうな古都香に、碎禍は初めて嘘をつく。古都香はそれを信じて泣き出してしまい、碎禍は後悔するのだった。古都香は冷静になった頭で碎禍の過去について知ることを決意する。そんな古都香を外に出す碎禍。そこに紫鬼が現れる。紫鬼は古都香を助けるべく碎禍と戦うことに。けれど、昔紫鬼の本気の姿を見たことのある碎禍はもう一度その姿が見たくて挑発する。紫鬼はそれに乗り、今までにない力で碎禍と戦う。碎禍を追い詰めた紫鬼がとどめを刺そうとするのを古都香が止め、碎禍が

負けを認めたことで戦いが終わった。碎禍は自警団に連れて行かれ、古都香は紫鬼と共に帰る。そこで紫鬼から碎禍の過去について聞くことに。それは今回の事件を招くきっかけとなった紫鬼が碎禍と戦った時の話だった。

《7章 記憶》

無事に現に戻ってきた古都香はたくさんメッセージと着信履歴が残っていた。旅行に行けなかったことを謝るために連絡を取ろうとするが誰一人として繋がらない。次の日から秋学期が始まるということで学校で直接謝ることに。しかし学校で再会した友人たちに古都香の記憶がなくなっていた。なんとか夏姫と裕也の記憶は戻ったものの、有紗と奏人は戻らず、奏人からは話し掛けないでほしいと言われてしまう。古都香は天界に行き、紫鬼たちに話をしてみることに。彼らにも理由はわからないが長時間天界に居たことが理由だと話す。記憶が戻った友人もいることで励まされた古都香は積極的に話し掛けることに。それでも記憶が戻らない有紗から、もう一度友だちになってほしいと頼まれる。古都香はすぐにそれを受け入れる。その夜、陽が古都香の元に訪れた。陽も長時間天界に居たことが原因だと考えており、天界と現のどちらかを選ばなくてはならないことを告げられる。古都香はどちらの世界も決めきれずにいたが、まずは奏人と話をするために家に押しかける。奏人とちゃんと言をすることで古都香についての記憶も戻り、今まで以上に仲良くなることができた二人。それを友人も喜んでくれた。

《8章 別離》

古都香は天界へと向かい、紫鬼たち天界で知り合った人々に別れを告げる。天界と現をどちらも好きになっていた古都香だが、古都香は現を選んだ。そして涙を堪えながら別れを告げた古都香は現へと戻る。もう天界には行かないという決意が揺らぎそうになりながらも山を降りていくのだった。

5. 最後に

この作品は、最初にも書いた通り初めて長編小説に挑戦したものだ。私はプロットを完成させたときに、この小説を書き終えたときどんな気持ちになるのだろうと考えたことがあった。結果は、「やっと終わった」と「楽しかった」だった。

この小説はプロットを完成させるまでに多くの時間を使った。ゼミのメンバーに意見をもらうことで当初考えていたものから変化し今の形になった。自分では思いつかない意見をもらったことが自分にとっての成長となり、一人で考えているよりも誰かに意見をもらうことの良さを感じた。私は当初考えていたものよりも、書き上げた今のシナリオのほうが良いものになったと感じている。

全8章ある小説のプロットを見ると、本当にこんなに長い小説を書き上げることができるのだろうかとも思ったし、日にちが過ぎるにつれて書き終わらないのではないかと焦る気持ちもあった。小説を書きたいという気持ちが高まるときもあれば、どうしてもやる気が起きないときもあった。けれどどんな気持ちのときでもパソコンを開いてキーボードを叩きだすとすぐに物語の中に入りこみ、主人公たちの生活を代わりに伝える私がいる。それを自覚した時、私は本当に書くことが好きなのだと思った。最後に感じた「楽しかった」は、そんな私の気持ちを全て込めた気持ちなのだと思う。

この話を書き始めるまで自分には長編を書く自信があまりなかった。それは技術的な部分が大きく、書き上げた今でもちゃんと伝わる文が書けているのか心配なところではある。それでも持てる力を出して書いたこの小説は私にとって大切な作品になった。今まで恥ずかしくて言えなかったが、今なら「私が書いたんだ」と堂々とと言えるような気がしている。

※本作品の前半（第1章～第4章）を掲載します。全文は以下に掲載されています。

pixiv みんなのシリーズ「桜色の夢」

<https://www.pixiv.net/series.php?id=925409>

桜色の夢

1章 帰郷

電車を降りて数人の観光客と共に、京都のとある無人駅へ。

彼女は大きく息を吸い込み、懐かしい空気を吐き出した。電車が去ったホームで辺りを見回すも、そこには一本の長く伸びた線路と山しかない。

なぜこんな何もないところに観光に来るのかはわからないが、昔から毎日何人か駅で見かけていたことを思い出す。

駅を出て、人通りの少ない道を歩き出す。幼い頃に何度も歩いた道を進むと、最近になって再開されたという場所に通り返り着いた。

かつては築何十年という木造建築にお年寄りが住んでいただけだった。しかし約十年ぶりに戻ってくると、そこには以前の木造建築はほん

の少ししかなく、新しく建てられたであろう洋風の家とマンションが並んでいる。その周辺では幼い子どもがボールで遊んでいた。

以前から住んでいた人はどうなったんだろう、と四宮古都香は思いを馳せながら

「変わったっちゃったなあ……」
と声を漏らした。

そうこうしているとお目当ての、ここも最近建てられたというマンションが見えてくる。階段で二階へと昇り、その端の部屋の前へと来た。

既に管理人とは何度も話しており、その時に預かった鍵を使って《四宮》と書かれた表札の扉を開ける。中には、以前来た時に少しずつ運んでおいた荷物がまとめて置かれている。

水色のカーテンを開けると、そこから見える景色は東京とはあまり変化がない。住宅地に建てられたマンションのため、周りの景色は家ば

り。それも古都香のよく知っている家ではないから地元に戻ってきた実感が湧かない。

古都香は片付けもそこそこの部屋を出た。ちゃんと鍵を閉めたことを確認して、橙色に染まりつつある空を見上げる。あと少ししたら暗くなってしまう。この辺りには未だに街灯が殆どないから暗くなったらただの暗闇だ。

記憶を頼りに歩き出す。アパートが建っていたり道が変わっていたりして迷いそうになりながらも、なんとか目的の場所へとたどり着いた。

そこは商店街だった。地域の人が多く訪れ、幼い頃古都香もいつも訪れていた。しかし、今は昔ほどの賑やかさはなく、夕食の買い物時だというのに閉まっているお店が多い。

とりあえず、一番食べたかったコロッケを求めて精肉店へと向かう。注文するとその店主が古都香を見て言った。

「珍しいね、若い子が来るなんて。はい、熱いから気をつけて」
「ありがとうございます。あの、空いてるお店って、もうこんなに少ないんですか？」

店主は申し訳なさそうに言う。

「ちょっと行つたところにスーパーができてな、皆そつちに行つたんよ。まあ、しゃーないよな」

久しぶりに聞いた地元の言葉。舞妓さんが話すような京都の言葉じゃないけれど、それでも地元の雰囲気を感じる。

「寂しい、ですな」

思わず呟くと、店主が「ありがとうございます」と笑顔を見せてくれる。古都香も笑顔返して去った。

結局、必要なものは全て商店街で購入した。無いものもあったが、なんとなくスーパーに行く気分にはならなかった。

幼い子ども達が既にいなくなった公園のベンチに座ってコロケを食べる。ここも昔よく遊んでいた場所だった。公園は昔の風景を変えていなくて、少しだけ安心した。

ブランコが一番好きで、よく幼馴染みと一緒に遊んでいた。滑り台を逆から上ってみたり、砂場では砂をかけ合って大人に怒られたり。なぜもっと普通に遊べなかったのか、と今更と思う。

もっと懐かしい気分浸っていたが、辺りが暗闇に近づいているのに気づく。早く帰らなければ真っ暗になって、周りがよくわからない。古都香は思い出の公園を最後に見回し、帰り道を歩き始めた。

※ ※ ※

電車で揺られること約一時間。そんな場所に古都香の通う大学はある。大学に通い始めて数日。初めての一人暮らしに加えて、今までの学校生活とは感覚が違う生活に戸惑うこともありながらもなんとか無事に過ごしていた。

友人もできたことで、我ながら良いスタートを切れたと思う。それはそんなある日のことだった。

講義が少し早めに終わり、その後は特に用事がなかったため家に帰ろうとしていた。

「古都香？」

どこからかそんな声が聞こえた。古都香は思わず振り返りを見回す。一人の男子学生と目が合った。

「やっぱり、古都香やー！」

関西弁の彼はにこっと笑いかける。

「えっと……かなちゃん!?」

思い当たる人物の名を呼ぶ。古都香のその声に頷く彼。

「嘘!? かなちゃんもこの大学だったの?」

古都香は彼を信じられない思いで見つめる。

片桐奏人かたぎりかなと

古都香の幼馴染みで、古都香が東京に引越す前日まで一緒に遊んでおり、一番仲が良かった。古都香が東京に行つてからは一度も会えていなかったけれど、彼が奏人なのだと言いつつ分かる。笑つた時に微かに見える八重歯は昔のままだった。

「久しぶりだね、かなちゃん！」

昔呼んでいた名前を駆け寄ると、奏人は恥ずかしそうに言う。

「そのかなちゃんっていうの、やめてくれへん? なんか今それ聞くとめっちゃ恥ずかしいんやけど……」

「んー、そっか。じゃあどうしよ……?」

奏人は久しぶりに会えたから嬉しそうに言う。

「奏人でええよ。俺も古都香つてさっき呼んだんやし」

「じゃあそうする」

そんなことを言い合いながら二人はどちらからともなく近くの椅子に腰かけた。

「ずっとここに住んでるの?」

古都香の問いに頷く奏人。

「うん、ずっと昔のまま。古都香はこの大学にいてるつてことは、京都に戻ってきたんやね」

「私だけね。今は新しくできたつていうアパートに住んでるの」

そう言つて古都香は住所を伝える。

「えっ、なんでそこ!? 俺やつたら学校の近くに住むけどな……」

自分が電車で一時間かけて来ているのを思い出したのか、奏人は驚く。「うん、親にも言われた。もっと近くに住んだほうが大学に行きやすいんじゃないかって。でも私は、どうせ京都に住むなら地元に戻りたいつて思つちやつたんだよね。だからなんとか探して、前の家に近いところにしたんだ。学校も一緒だし、いつでも会えるよ」

「そうやな、またどっか行こか。あ、久しぶりに公園でも行く?」

「公園ね、帰つてきた日に行つてみたんだよ」

古都香は商店街にで人の少なさに寂しさを感じたこと、公園がなんだか小さく感じたことを話した。奏人はそれに頷きながら聞いてくれる。

「古都香、山には行つてない? 俺らがよく遊んでた山」

「古都香、山には行つてない? 俺らがよく遊んでた山」

「そういえば、山でも走り回ってたよね。ドングリとか持つて帰ったりして」

懐かしい日のことを思い出す。確か引つ越す数日前にも山で遊んでいたはずだ。

「……引つ越す前くらいに古都香落ちたことあったよな」

「落ちた？ えーつと？」

古都香には全く覚えがない。しかし奏人はちゃんと覚えているようだった。

「ほら、俺らが山で追いかけてこしてた時に古都香落ちたやん。怪我はなかったけど、一瞬気が失ってたみたいだし。あの時すっごい心配したんやで？」

「え、そんなことあったっけ……？」

そんな衝撃的な出来事なら、奏人のように覚えていそうなものだが、全然覚えていない。山で遊んだことでも、他のことなら覚えているのに。

「ほんまに覚えてないの……？」

「う、うん、全然覚えてない。……ねえ、今度一緒に山に行かない？」

なにかを思い出せるかもしれない。そう思って誘ってみる。奏人はすぐに頷いた。

「ええよ。じゃあ、次の休みの日に行こか」

ある日曜日の十三時頃。

古都香と奏人は、約束通り山へと向かっていた。

迎えに来てくれた奏人と話しながら歩いていると、あつという間に入口に着いてしまう。

「……じゃあ、入るか」

奏人の声がほんの少し緊張していたように聞こえたけれど、奏人はさつさと入っていつてしまう。

で着いてしまった。

一本の木に触れる。子どもの頃に見ていた木はもつと大きかった筈だが、今日の前にあるのはなんだか細い。前とは違う木なのか、自分が大きくなったからそう感じるのかはわからないけれど、違う山に思えて変な感じがした。

「私が落ちたのつてどの辺？」

「えつと……」

山のあちこちを歩き回る奏人。ふと足を止めて下を覗き込む。

「確かこの辺やったと思うけど？」

古都香も隣で同じように下を覗き込んだ。

「そうな……」

思わず言葉が途切れる。

「ん？ どうした？」

「あれ、何？」

「ん？ どれのこと？」

「だから、あれ」

古都香はある場所を指差す。しかし奏人にはそれがわからないらしい。

古都香と古都香が指差す先を何度も交互に見ては首を傾げている。

古都香の目には真つ赤な鳥居が映っていた。山の中腹に不自然に建つ鳥居。周りには神社も、それに似た建物もなく、ただポツンと鳥居だけが存在している。

古都香はそれから目を離すことなく言う。

「真つ赤な鳥居。あそこにあるの、見えないの？」

「鳥居！？」

奏人は驚いたように古都香を見て、今度はじつと鳥居の建っている場所をみつめている。しかし何度も目を凝らして見ているものの、そこに何かあるのかわからないようだった。

「そっか、見えないんだ……」

古都香にははつきりと見える。だけど奏人には見えない。それがどういふことなのか、意味がわからない。

「古都香の気のせいちゃうの？」

奏人は純粹にそう聞いていた。からかうわけではないことがその声から充分伝わってくる。

折れたのは古都香の方だった。

「そう、かも。うん、あれはきつと気のせいだよね」

自分に言い聞かせるようにそう呟くと、最後にやはり見えている鳥居の姿を確認してからその場を後にした。

※ ※ ※

次の日の放課後、講義が終わると古都香はすぐに大学を出た。電車に乗り、地元まで帰ってくるとそのまま向かうのは昨日の山だ。

奏人には見えていないようだったけれど、確かに鳥居が建っていたのだ。なぜそんなところにあるのかなんてわからないけれど、そこにあるという事実だけは自分の目でもう一度確かめたかった。

山に入り、数分後。無事に頂上に辿り着く。昨日覗き込んだ場所を覗いてみると、やはりそこには真っ赤な鳥居が建っている。

「やっぱりあるじゃん」

じつと見つめていると、もつと近くで見たいという思いが募る。

一瞬躊躇った後、古都香は鳥居に近づくと、下へ降りてみることにした。

小さい頃には高い崖のように感じたのかもしれない。でも今は少し飛び降りれば簡単に着地できるくらいの高さだ。

しっかりと地面に着地した古都香は鳥居へと近づく。大きな鳥居は僅かに斜面になっている場所にも関わらずどっしりと構えている。

上から下までじっくり観察した後、両腕を回して届くかどうか、というくらいの太さの柱にそつと触れてみる。それはひんやりと冷たくて気持ち良かった。

古都香はこの不思議な鳥居をほんやりと見つめていた。どれだけの時間、鳥居を見つめていたのかわからない。けれど、知らない間に辺りはオレンジ色の光に包まれようとしていた。

左腕につけていた時計を確認すると、針は午後五時半を示していた。

帰る前に一度だけ。それはただの鳥居への好奇心での行動。それ以外に意味は無い。

古都香の足は、鳥居の柱と柱の間へと動いていた。

2章 天界

なぜこんなところにいるのだろうか。最初に思ったのは、それだった。

今、古都香は細い通路にいる。おそらくどこかの街の路地裏なのだろう。目線の先が明るくなっており、そこからなにやらざわざわと賑わっているような音が聞こえてくる。時折、目先の光が途切れるのは誰かが通路の前を横切っているからだろうか。

古都香は意を決して前に向かって歩き出した。そして細い通路を抜けて、古都香は息を飲んだ。

そこは見たことのない世界だった。豪華絢爛としか言いようのない世界が広がっていた。

「綺麗……」

思わず溜息と共に声が漏れた。

街並みや建物は華やかな平安時代を思わせる。ここには様々な店が殆ど隙間なく密集しており、その賑わいはまるで祭りの時の夜店のようだ。ところどころに時代劇でよく見かける縁台と呼ばれる赤い布が掛けられた長椅子がある。勿論赤い傘もセットだ。

街を煌々と照らすのは色とりどりの電気。一つの店に数十個の電球が付けられており、それが煌びやかな世界を生み出している。

街を眺めていて、古都香はふと違和感を覚えた。しかしその正体を掴む前に、違和感はどこかへと消えてしまった。

次に古都香が目にしたのは、服装だった。街を歩き交う人々は全員着物を着ている。対して古都香は灰色のロングコートに白色のニット、下はデニムを履いている。靴はお気に入りのスニーカーだ。しかしここには古都香のように洋服を着ている人は誰一人としていない。

それに気付いたと同時に、人々の視線にも気付いてしまった。古都香

が着ている洋服が珍しいのか、それとも異端者として見られているのか。どちらかはわからないが、どちらにしても古都香はなんだかいたたまれなくなつた。

「あ、あの……」

早くどこかへ行きたい。できるのならもう帰りたい。そんな思いで道行く人に声をかける。足を止めてくれたのは、薄青い色の着物を着た女性だった。

「どうしたの？」

女性の声が優しくかったことにひとまず安堵する。

「えっと……鳥居を、知りませんか？」

鳥居。そこを潜つたことでこの街に来たのだと仮定した。なにしろ記憶がそこで終わっているのだからそうするしかない。

「鳥居……？」

女性は困つた顔を見せる。

「残念だけど、ここには鳥居はないのよ」

「……そうですか」

どうしてないんですか。そう聞きたくなくなつてしまつたけれど、彼女がその答えを持っているとは限らない。

「すみません、ありがとうございます」

頭を下げ立ち去る古都香に掛けられた

「でも現に通じる扉なら……」

という声は聞こえていなかった。

※ ※ ※

ひたすら歩き続けて、古都香はいつの間にか開けた場所へと出てきていた。振り返っても街はかなり遠くにその片鱗を覗かせているだけだ。街では賑やかだったのに今は完全に静まり返り、地面も補正された石畳ではなく砂利道に変わっている。

どれだけ時間が経つたのかを知るため、古都香は左腕に嵌めた腕時計に目をやった。

「あれ？」

時計の針は午後五時半を示している。それは鳥居を潜る前に確認した時刻だ。自分の思い過ごしだったのかと針をよく見ると、数秒に一回のペースで秒針が動いていた。しかしそれではよく見ないと動いていることに気づかない。

不思議に思いながらも、今はそれどころではなかった。

古都香はここまで歩きながら、色々とこの状況についての可能性を考えていた。

一つ目はここが日本のどこかで開催されているイベントの会場だという説。その場合、イベントの参加者は全員着物での参加になり、それぞれ役に入り込んでいることになる。

二つ目はここが日本のどこかにあるテーマパークという説。その場合もキャストは着物を着て役に入り込んでいるだろう。

しかし、と古都香はその考えを否定した。なぜなら、もしここがイベントの会場やテーマパークなら、とつくに出口に着いている筈だから。いくら広い会場だとしても、道を真つ直ぐに歩き続けて出られないなんてことはありえない。

ならば、と新たな仮説を立てる。

三つ目の説は、古都香が平安時代にタイムスリップしてしまつたという説。そんなことが起こるのはマンガや小説の中だけだと充分理解している。しかし次に浮かんだ説がこれだったので仕方がない。

そこで古都香は気付いた。最初に街を見た時に感じた違和感がなんだったのか。それは《電気》だった。仮に平安時代にタイムスリップしたのだとして、そこに電気はある筈がない。

だとすれば、全ての仮説が間違つたものだという事になってしまう。

「はあ——」

長い溜息と共にその場にしゃがみこんだ。鳥居が見つからず、ここがどこなのかもわからない。その事実が重くのしかかり、脚にも一気疲れが流れ込む。

これからどうしたらいいのだろう。自分では前向きな性格だと思つていたけれど、ここまでどうすることもできない問題には後ろ向きな考え

にもなってしまう。

このまま鳥居が見つけれられずに帰れなかったら。友人は心配してくれるだろうか。探してくれるだろうか。

そんなことばかり考えていたからか、古都香は後ろから掛けられていた声に気づくことができなかった。

「ねえ、聞いている？」

そんな言葉と共に肩をとんとんと叩かれて

「ひゃあっ！」

思わず飛び退いてしまった。

「っ、そんなにびっくりしなくてもいいじゃん……」

古都香の後ろにいた、肩を叩いた張本人であろう男性は拗ねたように口を尖らせる。

「ご、ごめんなさい。びっくりしちゃって……」

ぺこりと頭を下げた古都香の頭上から「まあいいけど」と不服そうな声がかかってくる。そして彼は訊ねてきた。

「で、どうしたの？ お腹痛い？」

「そうじゃないんですけど……。ただ、帰る場所がわからなくて」

「迷子？」

迷子という言葉聞いて、自分の置かれている状況に納得する。

「迷子、みたいですよ……」

十八歳になって迷子になったかと思うと悲しくなってくるけれど、そう認めるしかない。

彼はなにかを考え始めてしまった。古都香はこれからどうするかを考へながら、じっと彼を見つめた。

身長は一八〇センチメートルくらいだろうか。彼も例に漏れず、着物を着ていた。淡い青色に色とりどりの大きな花模様が刺繍されている。黒色の髪は肩の辺りまで伸ばされており、毛先の方が風でふわふわと揺れている。しっかりとした身体つきだが、大きめの葡萄色の瞳と先程の拗ねた顔を思い浮かべるとなんだか自分よりも幼いようにも感じた。

あまりにもじっと見つめすぎたのか、ふと彼と視線が合う。

「あ、えっと……」

咄嗟にしろもどろになるが彼は気にしていなかったようで、思いもしなかった発言をした。

「俺と一緒に来る？」

「え……？」

「オレの家に来たら、なんかわかるかも。あんなのことを探す依頼が来てるかもしれないし」

依頼とは、彼は探偵でもしているのだろうか。そんなことを考えていると、彼はさっさと歩きだしてしまった。

「ついてきて」

「ま、待ってください！ 私、鳥居を潜ってここに来たんですけど、なにか知りませんか？」

慌てて追いかけてながらそう訊くと、彼は立ち止まって振り向いた。

「鳥居？」

「はい、そうです」

その答えを聞いた彼は、再びなにかを考え始めてしまう。その咳きか古都香にも届いてくる。

「鳥居ってウツツにあるっていう、あれのことかな……。でもこの子はカミじゃないし……けどオレらとも違うような……？」

そうして古都香をじっと見つめる葡萄色の瞳。やがて彼は領くと提案した。

「あんたがウツツから来たなら、帰り道を教えてあげられるよ。でもその前に、おにいと兄貴に会ってほしい」

「あなたの、お兄さん？」

「そう。会ってくれたらちゃんと帰り道まで案内する。約束する」

彼について行ってもいいのかと今更ながら心配になる。もしも彼が怪しい人だったら。もしも誘拐目的だったら。

でも、ここでこのまま行く宛てもなく彷徨うくらいなら、鳥居を知っているという彼について行った方がいいのかもしれない。

「わかりました。あなたについて行きます」

※ ※ ※

自らを紫苑しおんと名乗った彼は、真っ直ぐに山の方へと向かって行った。てつきり街へと戻るのだと思っていたから、彼に思わずそれで合っているのか尋ねてしまった。

「あの、街の方に戻らなくていいんですか?」

すると、彼はほんの少しだけ振り返って

「オレらの家はこちにあるから」

と答えるだけだった。

そのやり取りが行われたのが恐らく数十分前のこと。その間ずっと歩き続けているけれど、前方には紫苑の大きな背中があるだけでなにも見えてこない。横は木が生い茂っているだけだ。ただ救いだっただのが、砂利道とは違い、山の中だというのに道が補正されていたことだった。足は砂利道よりは疲れないし、補正されているということはこの道が使われているという証でもある。

だがいつになっても変化のない山道に、古都香は前方を歩く大きな背中に声を掛けた。

「あのー、いつになったら着くんでしょうか?」

すると彼は振り返ることなく答える。

「もうちょっと。頑張つて」

それ以上はなにも言わない彼に、古都香も黙って後をついていく。黙々と歩きながら、古都香は大学の友人のことを考えていた。もしもここに奏人や他の友人がいたなら。きつと楽しかっただろうな、と思う。他愛もない会話をし、足が疲れたなんて文句を言いながら笑い合っていた。それだけでも知らない場所にいる不安はどこかに消え去るだろう。

「着いた」

「え?」

着いた、と言われても古都香の目の前には紫苑の背中と横の木々しか見えていない。後ろから顔を覗かせる

「わあ……!」

数メートル先に大きな門がそびえ立っていた。その先には石畳が続いており、そこを通っていくと老舗の旅館のような雰囲気を出した建物建っている。その途中には大きな桜の木が見えた。古都香が暮らし

ている京都の桜は既に散り始めているが、これは遅咲きの桜なのだろうか。玄関に表札はなく、大きな引き戸から左右に建物が伸びている。どうやら二階もあるようだ。

「こっち」

紫苑は古都香に声を掛けて歩いて行く。そのまま引き戸をガラリと開けて中に入った。

「ただいまー」

しかし誰も出てこない。

「んー、ちょっとここで待って。おにいと兄貴探してくる」

そう言って左へと伸びる廊下を進んで行った。

一人で残された古都香は辺りを見回す。

玄関は靴が何十足も置けるスペースがあり、そこを上がると紫苑が向かった左の廊下の他にも右と正面に廊下が伸びている。正面の廊下の右側には二階へと続く階段がある。

周囲を見回していると、正面の廊下の奥から一人の青年が姿を現した。

彼は古都香の姿を見つけるとこちらに向かってくる。

「なにか依頼ですか?」

彼は恐らく紫苑のお兄さんのだろう。首の後ろですっきりと切られた黒髪や、右に流した前髪から覗く紫色の瞳は、濃淡が僅かに違っているとはいえ同じだ。ただしっかりとした身体つきの紫苑に反して、青年はすらつとした細身の体型を薄紫色の着物で包んでいる。

そんな彼に訊ねられた古都香は、紫苑も依頼という単語を使っていたことを思い出しながら答える。

「紫苑さんにここで待っていてほしいって言われたんです」

「紫苑に?」

彼は紫色の瞳を瞬かせる。そこに突如、紫苑の声が響いた。

「ああー! おにい、見つけた!」

「あ、紫苑。彼女はどしたの?」

駆け寄ってきた紫苑に尋ねる青年。

「迷子だって。あと、鳥居から来たって言ってたから連れてきた。ね?」

紫苑に視線を投げられ、古都香は頷く。

「はい、そうなんです」

「鳥居？ ということはカミの方なんですか？」

首を傾げて訊ねられるが、古都香はその単語の意味がわからなくて同じく首を傾げる。

「とりあえず、話をしましょうか。紫苑は兄さんと呼んできてくれるかな？ あなたはこちらへどうぞ」

紫苑は再び左の廊下へと消えた。古都香は紫苑に《おい》と呼ばれていた青年について歩いていく。

正面の廊下を進むと、いくつかの部屋を通り過ぎて突き当たりの部屋へと案内された。

「ここで待っていてください。お茶を入れてきますね」

そう言って青年は右隣の部屋へと消えていった。

再び一人になってしまった古都香は一番奥に座って辺りを見回す。あまり他人の家を観察するのは悪いとは思ったが、思わず辺りを見回す程に殆ど物が置かれていなかった。

部屋の真ん中に卓袱台机が一つ、周囲を座布団が四つ。その一つに古都香は座った。古都香が座っている左隣の奥には一五〇センチメートル程の棚がある。そこには可愛らしい犬のぬいぐるみや、なにやらよくわからない置物が置かれていた。例えるなら、こけしと土偶を混ぜたような感じだろうか。だが古都香にはぬいぐるみの良さはわかって、この謎の置物の良さはわからなかった。

そんなことをしていると

「お待ちせしました」

と青年が戻ってきた。

コトリ、と湯呑みを四つ置く青年に礼を言う。

「ありがとうございます」

「お客様ですから」

そう言って、青年は爽やかな笑みを見せた。

そこに古都香が入ってきた入口から紫苑が姿を見せた。

「もう来るって」

「そう、ありがとう。じゃあ座って待つてようか」

そう言って古都香の右隣に紫苑、左隣に青年が座る。

「えっと、まだ僕の名前を言っませんでしたね。僕は紫楓^{しほ}、紫苑の兄です。よろしく」

差し出された手に応えながら

「私、四宮古都香っています。よろしくお願いします」

自分も名乗る。

そして、二人を前にして改めて思う。彼らはかなりの美形だった。まるでテレビの中から抜け出してきたかのようだ。

そんなことを考えていると

「依頼の話はどうなった？」

という声と共に最後の人物が現れた。

二人と同じ黒い髪は鎖骨の辺りまで伸ばされたストレート。だが少し目にかかった前髪から覗く瞳は二人のものとは少しだけ異なり、紫色に青色が混ざっている。そんな彼は黒色の生地金色の刺繍が施された着物を着ており、少し近づきがたい雰囲気を感じた。

「あ、兄貴やっときた」

「兄さん、お茶は入ってるよ」

「おう、ありがとな」

古都香の正面に座った二人の兄は古都香をすつと見据えた。

「で、お前が鳥居の向こうから来たってやつか」

彼の言葉は決して威圧的ではなかったが、それでも緊張して声が震えてしまった。

「はい、四宮古都香といます」

「俺は紫鬼だ。こいつらは俺の弟。仲良くしてやってくれ」

「はい」

古都香の固い領きに、紫鬼は優しく笑いながら言う。

「別にお前のことを取って食おうなんて思っないから安心しろ。って言っても、オニが目の前にいるのに安心なんてできねえか」

「紫鬼さん、あの……」

「なんだ？」

「私、オニとか、よくわからなくて……」

古都香がそう言うと、ああ、と紫鬼は納得の表情を見せた。

「お前、よくわかんねえままにこいつらと話してたのか？ まあ人間ならわかんなくて当然か」

「……はい」

思わず俯いた視線の端で、紫鬼が動いた。と思つたら、いきなり頭を撫でられる。

「わかんねえことあつたらちゃんと聞いてもいいんだぞ？ 俺らは一応お前の味方だから」

紫鬼の綺麗な、そして優しい笑顔が目の前にある。その横を見れば紫苑と紫楓もいる。

「ありがとうございます」

緊張していた気持ちが少し軽くなった気がした。やっと古都香からも笑顔が零れる。

「よし、そんじゃあ古都香の知りたいことを教えてやる。まずはこの世界のことからな。あ、それとお前これから敬語なしな。俺敬語苦手だし、お前は変に緊張するだろ」

そう言うってから、紫鬼は話し始めた。

古都香が鳥居からやって来たこの世界は《天界》と呼ばれている。そして、古都香が住んでいる世界は《現》と呼ばれている。

この二つの世界はお互いに行き来することができる。天界から現へ行く場合には、これから古都香が連れて行ってもらおうとしている扉を、そして現から天界へ行く場合には古都香がやって来たように鳥居を使う。ただ、本来ならば鳥居の姿は人間には見えないはずだ。つまり、鳥居を見ることができ、そのうえ通つて天界へとやってきた古都香は特殊な存在ということになる。

この天界には二つの種族が存在している。それは《神》と《鬼》だ。彼ら三兄弟は鬼の種族だが、大半は神の種族らしい。らしい、というものは正確に人数を計っていないため、あやふやだからだ。だが街を歩けば鬼に出会うよりも神に出会う人数のほうが多いため、そのように言われている。当人同士にはどちらの種族かわかるようだが、古都香が街で出

会った人々を思い浮かべてみても違いはわからなかった。

神は扉を通つて現へと行くことのできる種族。特に京都は着物を着て歩いてもあまり不自然ではない、という理由から神に好まれているという。そのため鳥居もいくつかあり、その中の一つに古都香が出会ったのだらう。

対して鬼は現へと行くことができない。なぜだか理由はわからないが、扉を潜ろうとしても弾かれてしまう。そのため天界からは出たことがなく、人間も見たことがない。だから人間に対しての知識が神よりも乏しい。

紫鬼はそこまで話を終えると紫楓が入っていたお茶を啜つた。

「とまあこんな感じだけど、これでいいか？」

「うん、わかりやすかったよ。あ、一つ聞いてもいい？」

「なんだ？」

古都香は「これはあなたたちに聞くことじゃないのかもしれないけど」と前置きしてから訊ねた。

「現に神様がいてっていうことは、私も実は会ったことがあるのかな？」その問いには紫鬼は黙つて首を傾げた。紫楓と紫苑も同じく首を傾げる。

「僕たちは現に行つたことがないからね。現で神がなにをしているのか、人間にその姿が見えているのか、とか色々知らないんだ」

と紫楓が代表して答えた。

「そうよね、ごめんね」

と謝る。そして

「連れてきてくれてありがとう、紫苑くん。三人に会えて良かったよ」

心の底からの笑顔を見せた。紫苑も安心したよう笑顔を見せてくれた。

「じゃあ、もうそろそろ帰るか。俺が案内する」

紫鬼のその一言に古都香は頷く。だけどなぜだか寂しいという感情がそこにはあった。

最初は早く帰りがかった。知らない場所、帰り方もわからなくて、ただ不安で。だけど、紫苑に出会い、紫楓と紫鬼と出会って。もっと彼

らのことを知りたいと思い、ここに居たいと強く思う自分自身に驚いていた。

「ただ自分の居場所はここじゃない。現こそが自分の、人間の居るべき場所なのだ。だってここには神様と鬼はいるけれど、大切な友人はいないから。」

「だから帰ろうと決めた。」

「うん、そうね。色々教えてくれてありがとう。今更だけど、この世界のことを教えてもらっちゃって良かったのかな？」

「さあ？ それはわかんねえけど、どうせ人間に話しても信じてもらえねえんじゃないか？」

紫鬼の言葉に、古都香は奏人たち友人にこの出来事を話す場面を想像してみる。奏人は鳥居すら見えなかったのだ、「古都香、おもしろい夢見たんやなあ」なんて言っていて笑っていきそうだった。

「たしかにそうかも。じゃあ、天界に来たことは私だけの秘密ね」

「それがいい」

話し終えて、いざ帰ろうと立ち上がった古都香と紫鬼を紫楓が止めた。

「ねえ待って。それで街を歩いたら目立たないかな？」

改めて自分の服を見下ろす。街の人に見られていたのは、やはり服のせいだったのだろうか。

「確かに目立つな……」

紫鬼も古都香の姿を上から下まで見て呟く。

「じゃあさ、玲音に頼んだら？ オレ、呼んでくる」

そう言っただけで紫苑は部屋を出る。待っていると紫苑は言葉通り、数分後一人の女性を連れてきた。

彼女が玲音なのだろう。紅色の着物を着た彼女は同じく紅色の髪飾りで長い髪を纏めている。化粧は薄めだがはつきりとした顔立ちをしていて、はつきり言っただけの美人だった。

そんな玲音はかなりの大荷物を両手に持っていた。紫苑も隣でいくつか持たされている。

「あなたが古都香ちゃんね。紫苑の説明だけだとどんな子かわからなかったから色々持ってきたんだけど、どれが似合うかしら？」

早速荷物を解き始めた玲音に、紫鬼が溜息混じりに文句を零す。「やるなら隣の部屋に行ってくれ」

紫苑は左隣の部屋に荷物を置いた。玲音、古都香も後に続く。そこは完全な空き部屋だった。なに一つとして置いていない。

「それじゃあやるわよ」

玲音のその言葉で古都香の着せ替えが始まった。

濃い色はあまり似合わないかも、という玲音によって黒色や紺色の着物は事前に弾かれた。残ったのは淡い色をした着物だ。それらを白色のニット姿になった古都香にどんどん合わせていく。

「この二つね。どっちがいい？ 古都香ちゃんの好きな方でいいわよ」

玲音が選んだのはピンク色のものと水色のものだった。

古都香はじっくり見る。ピンク色のものは桜があしらわれており、対して水色のものには紫陽花があしらわれている。

「私は……こっちが好きです」

古都香が指したのはピンク色の着物だった。

「そうね、じゃあこっちにしましょうか」

玲音は古都香に服を脱ぐように促し、早速着付けを始める。

「一人でも着られるようにした方がいいわよね」

と言う玲音は古都香に丁寧に着付けを教えていった。そうしながらも着々と着付けを進めていく。着付けが終わった後は髪型も整える。鎖骨回りまで伸ばした髪をふんわりと纏めて髪留めをつける。

完成まではあつという間だった。

「さあ、完成！ うん、やっぱりこっちにして良かったわね」

玲音は満足そうに頷く。

対して古都香は少し緊張していた。幼い頃には七五三なんかで着たことがあるが、大きくなってからは初めてだ。色々なもので締め付けられたいして若干の苦しさはあるものの、玲音が何度か気にかけてくれたおかげで苦しさを感じない。着物を着ると、なんだか本当にこの世界の住人になったような気がしてくる。

「ほら、戻るわよ」

玲音が促されて隣の部屋に戻った。襖を開けると、三人から感嘆の声が漏れた。

「いいんじゃないの？」

と紫鬼。それに続いて紫楓と紫苑も褒めてくれる。

それを聞いた古都香は恥ずかしくなって頬を真っ赤に染めながら俯く。

「ほら、下見ないでちゃんと前を向いて。すっごく綺麗なんだから！」

「ありがとうございます、玲音さん。ちゃんとお返ししますね」

「それなんだけどね——」

玲音は古都香に笑顔で言った。

「——その着物、古都香ちゃんにあげるわ」

「そ、そんな、もらえません！」

首をぶんぶん振って拒否をする古都香に玲音は続ける。

「だってすっごく綺麗なんだから。この着物は古都香ちゃんが持つていた方が良いわ。でもその代わり、何回かは着てあげて。……ちよっと待つてね」

玲音は紫鬼にもらった紙になにやら書いていく。すぐに書き終わった

玲音はそのメモを古都香に渡した。

「これ、一応着方を書いておいたから。あたしが教えたのとこれがあればできると思うんだけど……」

古都香はメモを見る。そこには短時間で書いたようには思えないくらい細かく書いてあった。ところどころに絵も描いてある。

「ありがとうございます！ 着物、大事にします！」

古都香と玲音が笑い合う様子を見ていた紫鬼が声を掛ける。

「それじゃあ、もうそろそろ行くか？」

「はい、お願いします」

※ ※ ※

紫鬼と並んで街を歩く。もう誰にも注目されることはなかった。

最初に古都香が天界に現れた路地裏を通りすぎ、そのまま街の中心部

へと向かう。そこに突如、それは現れた。

「なにこれ……すっごい……！」

そこにあつたのは開かれた巨大な扉だった。縦に二十メートルくらい、横に十メートルくらい大きさはある。扉の奥は暗闇だ。そこに多くの人が飛び込んで消えていく。

「あの人たちって……！」

「神だな。俺ら鬼はあんなふうに通れねえから」

自嘲気味に笑った紫鬼と一緒に近づいていくと、その巨大さに圧倒されてしまう。

「ほら、古都香。ここを通ったら戻れるはずだ」

「うん……」

帰ると決めたはずなのにどうしてか帰りたくない気持ち揺らぐ。

そんな古都香の気持ちを知ってか知らずか、紫鬼は古都香の頭を撫でながら言った。

「またいつでも来いよ。歓迎するからさ」

「ありがとうございます」

一歩、二歩と前に進む。すると先程まではなにも映っていなかったのに、暗闇に鳥居から山の景色が映る。ここに飛び込めば帰れるんだと直感して、振り返る。その時には先程までの涙はもうなかった。

「ありがとうございます、紫苑さん！ 紫苑さんと紫楓さんと玲音さんにもよろしくね！」

「おう！」

大きく手を振るとそれに手を振り返す紫鬼。古都香はそんな紫鬼を目に焼き付けてから、扉へと飛び込んだ。

3章 夢現

教授の声が教室に響く。古都香は階段状になっている講義室の一番上に座っていた。隣には話をちゃんと聞いているのかいないのかわからない友人が三人並んで座っている。

講師は専門用語を交えながら話をした後、資料映像を映した。それを見ながら古都香はほんやりと考え事を始める。

あの日、天界と現を繋ぐ扉に飛び込んだ古都香は、気がつくとも真っ暗な闇の中に立っていた。ここがどこなのかもわからないため、僅かな明かりを求めてスマートフォンで電源をつける。明かりを一番明るく調節して辺りを照らすと、古都香の背後には鳥居があった。

とりあえず帰ろう、と山を下り始める。着物を着ているとかなり下りにくかったが、山の中で着替えるのもどうかと思い、頑張つて下りた。

道に出たところでどれくらいの時間を向こうで過ごしたのかと気になった。それと同時に、腕時計がおかしくなっていたことを思い出す。天界では秒針が数秒に一回のペースで動いていただけで、殆ど止まって見えた。

しかし現に戻ってきた今、秒針はちゃんと秒数を刻んでいる。

時計は二時半を示していた。現在が夜だということもあつてこれは午前二時のことだ。どうやらかなりの時間が経っていたようだった。

その後家に帰った古都香は、洋服に着替えてから玲音に教えてもらったようにして着物をしまった。

家に帰ってからも色々なことをしていた間に時間は朝になろうとしていることに気づく。学校も一限から入れているし休むわけにはいかないから風呂も早々に切り上げてベッドへ潜った。

睡魔はすぐにやってきて、古都香はあつという間に夢の世界へと旅立った。

それでもすぐに朝はやつてくる。なんとか目覚まし時計で起きた古都香は準備を終え、ギリギリで電車に飛び乗った。それから一時間、電車の中でも睡魔に勝てずに眠っていた古都香は、いつの間にか隣に座っていた奏人によって降りる駅で起こされた。

そして駅から学校までの道のりで奏人に言われたのだ。

「なんで昨日、来んかったん？」

奏人の発言の意図が読み取れない古都香は至つて真面目に返す。

「昨日は休みだったよね？」

そう、古都香が天界に向かったのは日曜日だった。だから一日中天界に居たとして、戻ってきた今日は月曜日。ずっとそう思い込んでいたのだが――。

「今日は火曜日やで？ 古都香、ほんまに大丈夫？」

――と心配されてしまった。

そんなことを話していると学校に着いてしまう。そのまま限目の教室まで行き、先に来ていた友人と挨拶を交わしたところで講義が始まった。

そして現在に至る。

昨日は天界から戻ってきてから、時間は確認したものの日にちまでは確認していなかった。だつてまさか天界にいた間に一日が過ぎていたなんて思いもしなかったからだ。

講義が始まるギリギリにスマートフォンで日にちを確認すると確かに火曜日になっていたし、今受けている講義も普段から火曜日に行われているものだ。月曜日だと思ひ込んでいた古都香はこの講義の教科書やファイルなどを残念ながら持つてきていない。

古都香は天界での行動をもう一度思い返す。確か、天界に辿り着いた後、鳥居を探して歩き回っていた。その後、街に出た古都香は紫苑と出会ったのだ。

歩き回っていた間に何時間も経っていたのだろうか。その可能性はあるが、腕時計が正常に動いていなかったからちゃんとした時間まではわからない。

とそこまで考えて古都香は今も腕に嵌めている時計を見た。それは今もちゃんと動いている。帰っていた時にも動いていたし、殆ど止まって見えたのは天界に居た時だけだった。もしかしたらそれがなにか関係があるのかもしれない。それを確かめる術を今は持ち合わせていないけれど。

そんな結論に出た古都香の耳に、講義の終わりを告げる音が届いた。教授が講義の終わりを告げると一斉に広い教室がざわめきに包まれる。

「終わつたああ……眠い……」

と、左隣からそんな声が聞えてくる。

「昨日寝てないの？」

声を掛けると、両腕を上にあげて欠伸までする友人——三津木裕也みつぎきひろやの姿があった。薄い茶色に髪を染めた彼の右耳には赤いピアスが光っている。奏人に紹介されて出会った彼は、最初に会った時にはなんとなくチャライ印象を抱き、その印象は今でも変わることがない。だが優しく信頼できる人だということもわかっている。

「ちよつと寝た……けどさ、どれだけ寝ても眠いんだけど」

「ちよつとつてどれくらいよ？」

裕也の隣に座っていた小鳥遊夏姫たかなしなつみが声を掛ける。出していた教科書やプリントは既に鞆の中に仕舞われていた。

彼女は古都香が受けている講義が同じで、そこから友だちになった。綺麗な黒髪を背中の中まで伸ばし、左耳には裕也と同じ赤いピアス。この間裕也が買ったが彼は右しか穴を開けていないため貰ったと言っていた。

「んー、四時間とか？ テレビ見てたらいつの間にかそんな時間になってた」

「……馬鹿じゃないの？」

「なっ……！」

夏姫の冷たい一言に裕也が反論する。そんな様子を笑いながら見ている奏人が古都香に声を掛けてきた。

「古都香も眠そうやったけど、大丈夫？」

「まだちよつと眠いかな。でも電車でも寝たからまだマシかも。起こしてくれてありがとね、助かった」

「ん、えーよ。てかさ、ほんまに昨日はどうしたん？」

奏人のその疑問に、今まで二人で言い合っていた夏姫と裕也もこちらの話に参加してくる。

「そうそう、古都香が来ないなんて珍しいじゃない？ 今まで頑張ってきたのにさ」

「で、今日も来なかったら連絡しようって話してたんだよ？」

三人に心配をかけてしまったことを後悔する。いくら天界に行ってい

て一日過ぎたのを知らなかつたとはいえ、彼らはちゃんとこの《現》で生きているのだ。

「ごめんね。えつとね……」

なんと説明しようかと考えて、紫鬼たちとも信じてもらえないだろうと話していたことを思い出す。そしてその時想像した奏人の台詞を使うことにした。

「実はね、面白い夢を見てたの」

煌びやかな世界で、街では神とすれ違い、優しい三兄弟やお姉さんのような鬼と出会った。それは本当に夢のような体験で、だけど家に大事に置いてある着物が、あれは現実だったのだと告げている。

しかしそんなことを話せるわけもなく、知りもしない三人の友人は同様に目を瞬かせた。

「夢ってまさか一日中寝てたなんて言わないよね？」

と代表して夏姫が訊いてくる。

「えつとお……」

古都香はなんと答えようかと困ってしまった。なにしろ一度も寝てはいないのだ。

「寝ずに夢を見ていた、というか……夢だと思ったらあれは現実だったというか……」

しどろもどろな返事しかできない。その答えに三人は更によくわからないという表情を見せる。そして最後には

「古都香、大丈夫？」

と全員から心配されてしまったのだった。

※ ※ ※

古都香は休日をだいたい家で過ごす。起きたら朝食を食べた後、洗濯や掃除を順にこなしていく。それが落ち着いたら好きなテレビ番組を見て、近くの商店街に買い出しに行く。スーパーがあるけれど、昔から馴染みのある商店街でできるだけ揃えるのが古都香の日常になっていた。

そんな古都香だが、誘ってもらえばどこにでも出かける。その日も夏

姫の声で集まっていた。

色々と話しながら辺りを見回していると、古都香はある和風の雑貨が並ぶ店を見つけた。自然と足が止まる。

「古都香?」

奏人に声を掛けられて我に返る。

「あ、ごめん!」

三人の元に駆け寄るが、夏姫はにこりと笑って言った。

「あの店、行こっか。良いよね?」

「勿論」

「うん、えーよ」

裕也と奏人の承諾も得たところで、夏姫が我先にと古都香が見ていた雑貨の店へと入る。夏姫に続いて裕也も入っていった。

「え、夏姫? 裕也くんも……」

「ほら、古都香」

奏人が古都香の手を握る。そのまま二人の後を追って進んでいく。

「か、奏人、あの……」

突然のことで動揺していると、奏人が店の前で振り返り笑いかける。

「だって古都香がほんやりしてるから。気になったんやろ?」

既に店では夏姫と裕也が二人でなにかを言い合いながら商品を見ている。

「う、うん。気になった……」

確かに和風の雑貨に惹かれた自分はいた。だが今はそれよりも奏人に握られている右手の方が気になる。

しかし奏人はあつさりとその手を離してしまふ。

「じゃあ早く見に行こー」

そう言っただけで店に入っただけでいい。

中には色とりどりの和風雑貨が並んでいた。小さな巾着袋やぬいぐるみ、アクセサリーまで売っている。

それらを見ていると、どうしても天界でのことを思い出してしまふ。彼らが着物を着ていたこと、そして町並みも和の要素が多かったからだ

ろうか。これらの小物を紫鬼たちが持っているところを想像してみると、なんだかほっこりした気分になる。

彼らにはなにが似合うだろうか。趣味や好きなものを知らないから天界でも日常的に使えるものの方がいいだろうか。

そんなことを考えながらどんどん手に取っていく。気づけば両手いっぱい持っていた。そして古都香は気づく。まるでこのまま買うみたいではないかと。買っても彼らに届けることはできない。

——否、それはできる。彼らに会いに行ける。

もう一度鳥居を潜ればいいのだ。玲音からもらった着物を着て行けば良い。そうすれば彼らに会えるし、現には来られない彼らにこの土産を渡すこともできる。

残るは古都香が行くと決めるだけだった。

「古都香、めっちゃ持ってるな!」

唐突に背後から声が掛けられて「ひゃあつ!」と声が漏れる。

「び、びっくりしたあ……。なんだ、奏人か」

「そんなにびっくりせんでもいいやろ……?」

奏人は拗ねたように口を尖らせる。まるで、初めて会った時の紫苑のように。

「で、それは誰かにあげるん?」

奏人が古都香の持っているものを覗き込みながら問うてくる。

「あげるつもりじゃなかったんだけど、ついこれが似合う人のことを考えてたら手に取ってて」

「ふーん。それって東京の友だちとか?」

「ううん、そうじゃないの。でも……大事な友だち、だと私は思ってる」

勝手に友だちだなんて言っているのかわからないから言葉を濁した。

それに対して奏人は真剣に言う。

「古都香が大事な友だちやと思ってるんやったら、渡したらいいんちゃう? だってその人のことを考えて手に取ったんやろ? せやったら、渡したほうが良いと思う」

古都香は奏人の言葉を聞いて考えを改めた。

「私、渡してみようかな。自分の気持ちに嘘つきたくないしね」

彼らに会いたいと思った自分の心に、嘘はいらない。また会いに来て
もいと言ってくれた紫鬼の言葉を信じたい。
だから、古都香はもう一度天界へと向かうことに決めた。

※ ※ ※

目を開けると、そこはなんの変哲もない路地裏だった。目線の先から
は光が漏れており、賑わいが聞えてくる。古都香は路地裏を抜け、街に
出る。

街を見回し、天界にやってきたことを実感する。ただ、以前と違うの
は玲音から貰った着物を着ていることで、周りの人から変な目で見られ
ることはない。

天界に向かうと決めてから数日、古都香は金曜日になるのを今か今か
と待ち望んでいた。そして金曜日の放課後、古都香は玲音から貰ったピ
ンク色の着物を着る。といっても簡単に着られるわけではなく、玲音に
教えてもらった言葉を思い出して、メモも見て、自分でも調べてなんと
か着ることができた。明るい時間から始めたというのに、全ての用意が
終わった時にはいつのまにか辺りは真っ暗になっていた。携帯と財布、
それから現のお土産を持って山へ向かい、本当にもう一度天界に行ける
のか心配しながらも鳥居を潜る。

そして今、古都香は無事に天界へと辿り着き、街を抜けるべく歩いて
いた。

初めて来た時には鳥居を探しながら歩いていつの間にか街を抜けてい
たのだが、いざ抜けようと思ってもなかなか抜けることができない。そ
れから暫く、古都香は街の中を彷徨い歩くことになってしまった。一度
行つた場所だから行けるだろうと思つてはいたのだが、自分の方向音痴ぶ
りは相当なものだったらしい。

そうこうしていると、自分の名前を呼ぶ声が聞えてきた。

「古都香、だよな？　こんなところでなにしてんだ？」

そこにいたのは、会いたいと思つていた紫鬼だった。

「紫鬼さん……！」

古都香は思わず紫鬼に駆け寄り抱きつく。

「会いたかったあ……」

「な、なんだ？　どうしたんだよ、現でなにかあったのか？」

古都香は紫鬼に抱きついたらまま顔を横に振る。

「そうじゃないんだけど、紫鬼さんたちの家に行こうと思つて歩き出
したのに全然街から出られなくて……同じところばかり歩いてるし。会
えて良かったあ……」

「そうだな。でもここで残念な知らせだ。俺はお前を家まで送つてやる
ことができない。つうか、今もあんまりお前と話してる時間はない」

「忙しいの？　私にできることなら協力するよ！」

「……じゃあとりあえず歩きながら説明するな」

と言つて紫鬼は歩き出す。古都香も隣に並んで歩き始めた。

「俺は今、迷子の女の子を探してるんだ。お前じゃなくて、もつと小さ
い女の子な」

とにやりと笑いながら言われてしまった。紫鬼は続ける。

「その子はどうやら、街を母親と歩いてはぐれたらしい。どれだけ
探しても見つからなくて結局俺に依頼してきたつてわけだ」

「警察みたいな人はいないの？」

「一応、自警団はある。けどあいつらは迷子の捜索とかはしないからな。
もつと大きな事件にならないと動かない」

平和そうに思える天界にも警察が出勤するくらいの事件が起きるらし
い。古都香にはそれが意外だった。

「警察が出勤するような事件つて起きるんだね」

「まあ、な」

古都香は紫鬼の顔を見上げた。前を向いた視線は、ここではないどこ
かへと向けられているような気がした。

「それでどんな子なの？」

古都香も辺りを見回す。だが迷子になっている子はおろか、子どもが
一人も見つからない。

「水色の着物に青の髪飾りで髪は長い。お前よりももうちょっと長いく
らいかな」

古都香の髪は鎖骨の辺りまで伸ばされている。それよりも長いということ、背中の真ん中辺りだろうか。

「その子の名前は？」

「亜衣だ。俺も知り会いだから見つかればすぐにわかるはずなんだが……さて、どうすっかな……」

「どうやら全く見つからずに紫鬼も困っていたらしい。

「ちゃんと探すからもう少し話してもいい？」

「別にいいぞ。聞きたいことでもあるのか？」

「うん。私が初めて来たときね、紫苑くんも紫楓くんも依頼っていうことを言ってたんだけど、三人は探偵なの？」

紫鬼は古都香を見つめると首を傾げる。

「ダンテイってなんだ？」

「えっとね、迷子を捜してほしいとか、事件を解決してほしいっていう依頼が来たら解決する仕事なの」

紫鬼はそのざっくりとした内容で納得してくれたらしく頷いた。

「そういうことならその解釈で合ってると思うぞ。俺らもいろんな奴らの依頼を受けては解決してるし。その代わりに金とか物とか、いろんなものを貰って生活してるんだ。鬼が多いけど、最近では神からも依頼を受けることがあるかな」

「神様も困ることがあるんだね」

「そりゃあ、生きてたら困ることだってあるよ」

そんな話をしながら、二人は街に視線を巡らせながら歩いていく。しかし本来の目的である女の子——亜衣の姿はなかなか見つからない。

天界には事件なんて起きないと思っていたけれど、自警団が動くような事件も起きると聞いて心配だった。

隣を歩く紫鬼の顔を盗み見ると、紫鬼は整った真剣な顔を辺りに向けていた。さっきまで冗談を言っていた雰囲気は感じられない。

と、あまりにもじつと見つめすぎたのか紫鬼がこちらを向いた。青紫色の瞳と古都香の黒色の瞳の視線の先がぶつかる。

「どうした？」

「な、なんでもない……。ただちょっと怖くなっちゃって……」

「怖い？」

「天界って平和な場所だと勝手に思ってたから、事件も起きるって聞くし、亜衣ちゃんも心配だし……」

紫鬼は古都香から視線を外して前を見据える。そして先程と同じ表情で言った。

「もう今は怖い思いをすることは無いと思う。この世界もだんだんと平和になっていってるよ」

「そっか、じゃあ良か——紫鬼さん？」

紫鬼の言葉に安心して笑顔が零れる古都香の台詞が、紫鬼の手のひらによって遮られた。

「あそこ、なんか聞こえる。たぶん女の子の声」

紫鬼が指で示したのは密集している店と店の間だった。

「もしかして、亜衣ちゃん!？」

古都香は我先にと駆け出す。紫鬼の制止を促す声はざわめきに消えて届かない。

人混みをかき分け、紫鬼が示していた場所へと辿り着く。その隅では女の子が蹲って泣いていた。しゃがみこんで視線を合わせる。

「あの……もしかして、亜衣ちゃん？」

女の子に声を掛けるとゆっくと顔を上げて頷いてくれる。

紫鬼の言っていた通り、水色の着物。黒い髪は背中の中程まで伸ばされており、右側に青い髪飾りをつけている。大きな瞳は、ずっと泣いていたのか真っ赤に腫れて濡れていた。

少女は聞こえるか聞こえないかの声で尋ねてくる。

「……お姉ちゃん、誰？」

「私は古都香。紫鬼さんと一緒に亜衣ちゃんを探してたの」

少女は何度か瞳を瞬かせる。そして再び大きな瞳から涙を零し始めてしまった。

「ど、どうしたの?? どっか怪我してるんか?」

「怪我はしてなさそうだな」

少女の代わりに答えたのは紫鬼だった。

「つたく先に行きやがって。もし亜衣じゃなくて怪しい奴だったらどう

するつもりだったんだよ」

「紫鬼さんは私に怪しい人がいる場所なんて教ええないでしょ」

呆れ口調で文句を言う紫鬼に言い返す。

「信頼してくれてるのは良いけど、ちょっとは疑うってことを覚えろよ。最初に出会った時だって、のこのこと紫苑について来やがって」

「そ、それは今は良いでしょ？ それよりも、亜衣ちゃんに怪我がなくて良かったよ」

亜衣の頭を撫でてあげると、瞳からは大粒の涙を零しながらもすり寄ってきた。

「もう泣かないで。大丈夫、紫鬼さんがちゃんと家まで連れて行ってくれるから」

「お姉ちゃんじゃないの？」

亜衣の潤んだ瞳で見つめられ、可愛く首を傾げられてしまう。う、と言葉に詰まってしまった。

「実は私も迷子なんだ。それで紫鬼さんに助けてもらったの」

と正直に言うと亜衣は笑顔になる。

「お姉ちゃんも迷子なんだ。一緒だね」

「うん、一緒」

と二人して笑い合った。

「じゃあ帰るぞー。亜衣のお母さんも待つてるからな」

「うん！」

お母さん、という単語を聞いた亜衣は出会ってから一番の笑顔で頷いた。

亜衣を間に挟んで、三人で並んで歩く。そんな風になっていると、幼い頃のことを思い出した。

公園に両親と出掛けて、その帰りには三人で並んで帰る。それから母親の作った大好きな料理を食べる。

こんなことを思い出したのは一人暮らしをしているからだろうか。両親に暫く会っていないからだろうか。母親の料理を食べていないからだろうか。夏休みくらいには一度帰ろう、なんてことを考えていた。

そんなことを考えていたら、亜衣に繋がっていた手を軽く引かれた。

「どうしたの？」

「お姉ちゃん。お姉ちゃんは鬼なの？ 神なの？」

少女は首をコテンと倒して訊いてくる。

「私はどっちでもないよ。私はね、人間のの」

少女はその意味がわからないようで大きな瞳を瞬かせた。

「現から来たんだよ。普段は現で生きてるの」

亜衣にはこの言葉の意味は通じただろうか。古都香のことをじつと見ためてくるが、理解できているのかはわからない。

だがどうやらわかっていたようだった。

「亜衣にはまだ難しいよな。人間なんていきなり言われてもさ」

「うん、わかんない」

と紫鬼の言葉に亜衣は頷く。

「まあこいつは、変な奴っていうことだ」

「ちょ……別に変ではないと思うんだけど！？」

意義を唱える古都香に亜衣が笑う。

「お姉ちゃんもお兄ちゃんも、おもしろーい！」

古都香と紫鬼も顔を見合わせ、二人して笑い合う。

そんな風に三人で笑いながら歩いていくと、やがて森を抜けて紫鬼の家までやってきた。そこには紫楓と紫苑一緒に知らない女性がいる。

「亜衣！」

「お母さん！」

女性の声に、亜衣は繋がれていた両手を離して駆けていく。

亜衣を見送った古都香は呟く。

「良かったね、亜衣ちゃん」

「そうだな」

誰かに言ったわけではなかったが、紫鬼が答えてくれた。

笑顔で手を振る亜衣とひたすら感謝し続ける母親と別れて、紫楓と紫苑と合流する。

「おかえりなさい、古都香さん」

と笑顔な紫楓。

「古都香！ おかえり！」

と熱烈な歓迎をしてくれる紫苑。

「ただいま、紫楓くん、紫苑くん」

家族のように出迎えてくれた二人に恥ずかしくも嬉しくなる。

「とりあえず入るぞ。話はそれからな」

という紫鬼の言葉に四人が順に家の中に入って行く。四人が同時に入ってもまだスペースがある玄関に改めて関心していると、さっさと三人は正面の廊下を進んでいく。

中に入ると、古都香は一番奥に座った。三人の座る場所も決まっているようで、前回と同じ景色になる。

「まず、二人とも留守番ありがとな。母親を一人にしておくわけにもいかないから助かった」

紫鬼の劳いの言葉に二人は当然のことのように頷く。

「平気だよ。それに兄さんが街に行ったらだいたい探してる人は見つかるしね。」

「どうして?」

それに紫苑が簡単に答えた。

「目も耳もオレらより良いから」

確かにざわめきの中でも亜衣の泣き声が聞こえていた。

「そっか、亜衣ちゃんの声も聞こえてたもんね」

それに人混みで古都香を見つけたこともある。洋服だと目立つだろうが今は着物を着ているから他の人に紛れていたはずだった。

だが新たな疑問が生まれる。

「でもさ、どうして二人共待ってたの?」

それに答えたのは紫鬼だった。

「俺が二人とも待つてろって言ったんだよ。一緒に行っても連絡の取りようがないからな。じゃあ、俺は部屋に戻るから、ゆっくりしていけよ」

そう言って紫鬼は部屋を出て言った。

「紫鬼さん、忙しいの?」

「いろんな依頼が来るからね。亜衣ちゃんみたいに迷子とか、部屋の掃

除してほしいとか。そんなのが山ほどくるから整理しないと。といって、だいたいは後で僕が整理し直すだけだね」

と笑って言いながら、紫楓は兄に対してまるで愛し子を見るみたいに目を細めた。

「なんか、大変そうね」

「楽しいから平気だよ」

「オレは整理嫌い……」

紫楓の言葉を受けて紫苑が面白くなさそうに呟く。

「私も整理って苦手かな。いっぱいあればあるほど大変だよね」

紫苑がうん、と何度も元氣いっぱい頷く。

そんな紫苑を見ていると、危うくここに来た目的を忘れかけるところだった。

「そうだ。これね、現のお土産なんだ」

そう言って紙袋からいくつもの包を取り出す。包装紙の種類を違うものにしておいたお陰で誰にあげるものがわかりやすい。

「はい、これは紫楓くん、こっちは紫苑くんね」

それぞれに包を渡すと、紫楓は丁寧、紫苑は勢いよく開けた。

「これなに?」

「がま口財布って言って、お金を入れるものだよ」

紫楓に渡したものは、彼の着物の色と合わせて薄紫色のもの。紫苑のものは淡い青色に紫色が差し色として使われたものを渡した。

へー、と言いながら紫苑ががま口部分をばちばちと開け閉めする。どうやらそれが楽しいらしい。

「皆の趣味と違ってわからないし、天界でなにが役に立つかってのもわからなかったんだけど。ここにもお店があるっていうことはお金を使うわけだから、ちょっととした小銭入れとかなら使えるかなって。あ、お金じゃなくても小さいものならなんでも良いよ。自由に使ってほしいな」

その言葉に紫楓が頷いた。

「ありがとう、大事に使うね」

「喜んでもらえた……かな?」

「勿論!」

という紫楓に続いて紫苑も元気よく頷く。

「良かったー。なんか安心した。紫鬼さんにも渡してこようかな。部屋つてどこかな……?」

「オレが案内する」

紫苑が名乗り出てくれたことで二人は部屋を出て行った。

「ここが兄貴の部屋」

二人は玄関から左の廊下を進んでいくつもの部屋が並ぶ中の一室の前で立ち止まる。

「じゃあオレは先に戻ってるから」

「うん、ありがとう」

お礼を言ってから中に入っているはずの紫鬼に声を掛ける。

「紫鬼さん、入ってもいいですか?」

しかしいくら待っても返事がない。

「紫鬼さん? 入っちゃいますよ?」

どれだけ声を掛けても返事がないため、そつと襖を開ける。

中に入ると襖の反対側は壁ではなく障子で仕切られている。右側に小さな机があり、そこに紫鬼がいた。散らばった書類の中でこちらに背中を向けて突っ伏している。

「紫鬼さん!？」

なにかあったのかと慌てて近づいてみてわかった。どうやら彼は眠っているようだ。しっかりと閉じられた長い睫を見つめていると寝息が聞こえてくる。

古都香は安心して周りを見る。

紫鬼の部屋は居間よりは狭く、一人部屋として丁度良いくらいの広さだった。やはり物が少なく、左側に布団が折りたたまれている傍には居間にあったような棚があり、そこには書類が並んでいる。いくつもの紙の束が紐で纏められており、一見すると綺麗に収納されているように見える。しかし隙間から見える表紙の文字が反対に向いていたりしていた。

あまり触るのもよくないと思った古都香だったが、辺りに散らばっている書類は纏めておこうと思った。拾い上げていると、どこからか風が

吹いて更に散らばってしまう。

風を感じた方を見ると、障子扉が数センチだけ開いていた。どうやらそこから風が入り込んだらしい。閉めようとして、そこから覗いた景色に驚いた。

障子を開くと縁側があり、そこからは玄関からも見えた桜の木があった。未だに満開に咲く桜は風が吹く度に数枚ずつ散っていくものの、散りつくしてしまう気配は全くない。

古都香はその桜をずっと見ていたと思った。散り終わってしまう前に記憶に残しておこうと、ポケットからスマートフォンを取り出す。カメラを起動させてシャッターボタンを押すと、カシャッという軽い音と共に写真が保存された。

「このままずっと咲いたら良いのに」

思わず望んだことが呟きとなって零れる。

「その桜は散らねえぞ」

そんな声が背後から聞こえて驚いた。

「紫鬼さん! あ、勝手に入ってごめんさい!」

「あ? ああ、別に良いよ。寝てた俺が悪い」

目をこする紫鬼は古都香の手に持っていた書類を見つけて辺りを見回す。

「書類……」

「あ、あんまり触るのも悪いのかな、と思ったんだけど。散らばったから集めておいたの」

はい、と手渡す。それと一緒に、持ってきておいたお土産も渡した。

「これは現からのお土産だよ。好きなものとかわからないから、ここでも使えるように財布にしたの」

「本当に? なんか、色々悪いな」

「ううん、前助けてくれたお礼だから」

紫鬼は包を開けてがま口財布をじっと見つめる。紫色に青色が差し色で使われたものだ。紫鬼の青紫色の瞳を思い出してこれを買った。紫鬼は机の小さな引き出しから小さな皮でできた袋を取り出した。

「それは?」

「天界の金が入ってるんだよ」

ほら、と袋の中を開いて見せてくれる。覗き込むと、そこには金貨や銀貨が大量に入っていた。それを何枚か手に取り、財布に入れていく。

「ちよーど良いな。これなら落とすこともなさそうだし」

「それなら良かった」

微笑んだ古都香を、開けたままだった障子から風が吹いてくる。ふと紫鬼が古都香の髪に手を伸ばして、一緒に飛んできたのだろう桜の花弁を取ってくれる。

「この桜、でかいだろ。綺麗だけど掃除が大変なんだよな」

なんて苦笑いを浮かべる紫鬼。

「散らないって言ってなかった？」

「ああ、この桜は絶対には……とは言えないけど、散らない。いや、花弁がなくならないって言ったほうが正解かもな」

二人して桜の木を見上げた。

「桜って春にしか咲かないんじゃないの？ 遅咲きの桜でももう散っちゃってる時期だと思ってる」

古都香の疑問に、紫鬼が答えてくれる。

「現には季節があるんだっけ。しかもちゃんと巡ってくるやつ。でもここには季節はあるけどずっと一緒だからな」

「どういうこと？」

「つまり、ずっと春だってこと。俺らがいるのが天界の西側なんだけど、ここはずっと春なんだ。北側はずっと冬で雪が降ったり。そんな感じなのがこの天界」

ずっと春だから、ずっとこの桜を見ていることができる。現ですっと見ていたいと思ってもすぐに散ってしまうから、なんだか寂しいけれど。だから人々はお花見を始めたのかもしれない、とふと思った。

「なんか良いな、こういうの。夢の世界って感じがする」

「夢、か。俺にとっては現が夢の世界だけだな。行きたくても行けない夢の場所、なんてな」

お互いにお互いの世界を夢に見て、そして自分の世界で生きていく。でも今の古都香は天界にやってきたことで、二つの世界が古都香の現実

となった。

現も好きで、天界も好きになった。だから、古都香は二つの世界で生きていきたいと思った。そんな古都香に紫鬼が訊ねる。

「まだ現に戻らなくて大丈夫なのか？ いくらここがお前の夢の世界だとしても、ちゃんとあつちも大事にしるよ？」

それを聞いて古都香は考える。一心金曜日之夜には出掛けなければ、どれくらいの時間が経ったのかもわからないし、また無断で学校を休んだら皆に心配をかけてしまうかもしれない。そう思うとなんだか不安になっってしまった。

「うん、そうだね。後は玲音さんにお土産を渡したら帰ろうかな」

その言葉に紫鬼は一瞬考えてから

「今は玲音はいないかもしれないな」

「え、そうなの？」

「すぐに仕事に出掛けるからな。昼間に家にいるのは稀なんだ。いつ帰って来るかもわかんねえしな……」

「そっかあ……。じゃあどうしようかな」

古都香の思案顔を見つめて、紫鬼が提案してくれる。

「俺が後で渡してやるよ。ちゃんと古都香からだって言ってな」

「本当に？ じゃあ頼もうかな」

現のことが心配だった古都香にとってはありがたい申し出だった。また別の機会にとも思ったが、その時に玲音がいるとも限らない。

「おう、任せとけ」

そう言ってくれる紫鬼に玲音へのお土産を託して、部屋を出た。

今回は紫楓と紫苑が送ってくれることになった。

最初は紫楓だけだったのだが、紫苑が「オレも行く！」と言って聞かず、結局は三人で歩くことになったのだ。

三人で街を歩きながら、二人が色々教えてくれた。変わった食べ物のこと、流行りの遊びなど。その中に現でも見慣れたものが度々登場した。どうやら神は扉を通って現にやってきては食べ物などを持ち帰ってくるらしい。紫苑が大事にしていた犬のぬいぐるみも、実は現で作られた

自己分析から着想した「リアル・ファンタジー」小説 ～「桜色の夢」～

ものでそれを神が販売していたというのだ。現のものは天界で作られるよりも高価で、紫苑はそのために紫鬼からもらう小遣いを頑張って溜めたらしい。

そんな話を聞いていると、現も天界もなにも変わりがないと感じる。子どもは小遣いを溜めて、欲しいものを買う。大人になったら生きていくため、家族のために働いて稼ぐ。そんな社会の仕組みは現だろうと天界だろうと関係ない。人間も、神も、鬼も関係ない。

古都香は、天界を夢の世界だと例えた。それは桜が咲き続けるということだけではなく、この世界そのものを夢の世界だと感じていた。だけど天界を好きになるにつれて、どちらが現実でどちらが夢なのかわからなくなっていた。

結局はどちらも現実なのだ。二つの世界を行き来しているのは古都香自身なのだから、それはわかっていたはずだった。でもどちらも夢の世界だとも感じる。本当は天界で過ごすのが自分の生き方なのではないか。そんなことも考えてしまいそうになる。

結局、古都香の中で答えが出ないまま、扉の前に到着した。

「ここでお別れだね」

「やだ……。古都香とずっと一緒が良い」

別れるのを拒んで着物の袖口を引っ張る紫苑。それをやめさせようと手を添える紫楓。でもそんな紫楓も寂しそうだつた。

「また来るよ。絶対に来る」

古都香は二人に誓う。

「私、この天界が好きになったから。もつとここに居たいなって思うんだ。だからまた来るよ」

紫楓と紫苑の目を見つめる。二人の紫の瞳が揺れて、でもしつかりと古都香を見つめ返してくれた。

最初に領いたのは紫苑だった。

「わかった、じゃあ待ってる」

「気楽に遊びに来てね」

「うん、ありがと」

二人にお礼を言って、古都香は大きな扉に飛び込んだ。

※ ※ ※

その夜、紫鬼は玲音の元を訪れていた。目的は勿論、古都香から託されたお土産を渡すためだった。

いきなり玄関を開けると、草履が脱ぎ散らかされている。紫鬼は溜息を吐き出し、どんどん中へ入っていく。

「玲音？ 居るんだろ？」

狭い廊下を進んだ先にある部屋に入ると、そこには着物をかなり着崩して床に寝ている玲音がいた。周りには瓶が散らかっている。

「やつぱりな……」

と再び溜息が零れる。

玲音はかなり酒を飲む。仕事のある日は特にひどく、次の日は使い物にならなくなってしまうほどに。紫鬼はそんな玲音に古都香を合わせるのをためらったのだ。前の方が仕事だと知っていたからこそ、今日は酷いとわかっていった。

「ほら、大丈夫かー？」

声を掛けるが返事がない。酒を飲んでしまった玲音は、一度寝てしまふと全く起きなくなる。これもいつものことで、だからこそ玲音が起きる時間も知っていた。だが少しだけ早かったようだ。

眠る玲音の傍に座り、起きてくるのを待つ。こうなればひたすら待つしか方法はない。

やがて寝返りを打った玲音は、低く唸りながら体を起こした。

「あれえー？ 紫鬼じゃん。どうしたの？」

その声は寝起きというよりかは酔いが醒めていないような声だった。

「ほら、これ。古都香から」

そう言って手渡す。玲音の物は紫鬼が貰ったものとは違い、手触りで箱に入っていることがわかった。

「古都香ちゃん！ 古都香ちゃんが来てるの？」

がばつと勢いよく体を起こした玲音は着物が崩れているのも気にせず、紫鬼に詰め寄る。

「もう帰ったよ。あと着物を直せ」

紫鬼がいることも気にせずに着物を直しながら、玲音は呟く。

「古都香ちゃんがいるって言うてくれたらすぐに家に行ったのに……」

「お前のそんな姿見せられるかよ。たぶんだけど、あいつはお前のこと、かっこいい姉みたいに思ってるぞ」

「なんでそんなことわかるのよ」

「あいつの目を見てたらわかる」

簡単に直し終わった玲音は、今度はお土産に手を伸ばす。包をビリビリと破ると中から透明な箱に入った髪飾りが現れた。

「可愛い！ さっきまで古都香ちゃんじゃなくてあんたが準備したんじゃないって疑ってたけど、これは絶対に古都香ちゃんだわ」

「どういう意味だよ……」

文句を零す紫鬼に構わず、玲音は早速髪飾りを付ける。

濃い赤色を中心に色々な花があしらわれた髪飾りは可愛い印象を与える。いつもは可愛い感じよりもかっこいい感じの髪飾りを好んでつける玲音にとつて、それはあまり買わないもので、だからこそすぐに気に入った。

「これからはこっちにしようかしら」

「いいんじゃないの」

喜ぶ玲音をやっぱり古都香に見せれば良かったかな、なんて思った紫鬼だったが

「今度会ったら思いっきり抱きしめてあげよう」

と笑顔で放たれた言葉に、やっぱり会わせなくて正解だったと思いついた紫鬼だった。

4章 出逢

あの日から、古都香は何度も天界へと足を運んでいた。今ではちゃんと街を抜け、山を越えて紫鬼たちが住む家へと行くことができるようになった。

家へ入るといつも彼らは「お帰り」と迎えてくれる。最初の頃は「こ

んにちは」だった古都香の挨拶も、最近では「ただいま」へと変化した。

その日も古都香は金曜日の放課後になったらすぐに着替えて山へと出掛けた。もう着物の着付けも慣れてきて、辺りが明るいうちに外に出られるようになった。

いつものように旅館のような風貌の家へと辿り着くと、現ではもう六月になって見られなくなった桜が出迎えてくれる。それを見て、本当に散らない桜なんだと実感する。

「ただいま」

そう言つて入ると紫楓が出迎えてくれた。

「あ、古都香さん、おかえりなさい」

「うん、ただいま。また来ちゃった」

「いつでも歓迎だよ」

そう言つてくれた紫楓と一緒に居間へと入る。そこにはいつも忙しそうな紫鬼も、たまに街に遊びに行くという紫苑も揃っていた。

「今日は皆いんだね」

「仕事は全部片付いたからな。主に紫楓がやってくれたけど」

なんて話をしながら古都香はいつもの場所に座る。座った途端、隣にいた紫苑がすり寄ってきた。

「また現の話聞かせて」

「いいけど、ちょっと離れようか」

と紫苑を押しつけて元の位置に戻すと、なにを話そうかと考える。話の内容はすぐに思いついた。

「そうだ、この間新しい友だちができたんだよ」

そう言つてその時のことを思い出す。

※ ※ ※

学校の帰り道、古都香はその日もいつもの面々と一緒に街を歩いていく。最近では裕也がバイトを始め、それが始まるまで四人で街を歩きますが時間を潰すというのが日常的になっていた。ただ街を歩くだけでも少しずつ変化があるし、いつもとは違う道を歩いてみると新しい発見が

あつたりして結構楽しい。

それは六月になったある日のことだった。夏姫が見たいと言って服が並ぶ店へと入る。中は完全に女の子のためのスペースといった雰囲気でも愛らしい印象のお店だった。古都香と夏姫は二人で盛り上がるが、奏人と裕也は辺りを見回しては少しだけ居心地が悪そうにしていたのが新鮮な反応で面白かった。

夏姫が求めていたものを見つけ、レジに向かっていている間に二人の元に戻ろうと思ったらどこにもいない。探していると夏姫が合流した。

「二人は？」

という問いかけにいいことを告げる。

「外に行ったのかも」

と夏姫と一緒に外に出てみる。そこには想像通り奏人と裕也がいた。しかしそこには女の子も一緒だ。三人はなにやら親しげに話している。

夏姫が近づいて話しかけた。

「その子、知り会い？」

「お、やつと戻ってきた。この子、俺らと同じ大学でさ、俺が受けてる講義が一緒に、そこで仲良くなったんだよ」

「初めまして、九条有紗です」

ぺこりと頭を下げた有紗は可愛らしい雰囲気の子だ。薄茶色のポプヘアーの彼女は大きな瞳で古都香と夏姫を見つめるとにっこりと笑いかけた。

「初めまして、小鳥遊夏姫よ」

「四宮古都香です」

二人の挨拶が終わると、裕也が有紗に話しかける。

「ね、俺らこれからもうちよつと遊ぶんだけどさ、一緒に遊ばない？有紗ちゃんがいってくれたらもつと楽しくなると思うんだよね」

そんな裕也を見て夏姫が呆れたように溜息を吐き出す。裕也がこうやって女の子を誘うのはいつものことだ。だがだいたい彼氏が待ってる、友だちが待ってる、と振られている。

そして今回の有紗の反応は

「えっと、これからバイトに行かなきゃいけないって……休みの日だった

ら良かったんだけど、ごめんね」

というものだった。

「そっかあ、残念」

困ったようにそう話す裕也を見て、益々申し訳なさそうになる有紗。彼女はかなり良い子なのだろう、何度もごめんねと謝っている。

そんな有紗を見兼ねて夏姫が声を掛けた。

「裕也のことは気にしなくていいからさ。早くバイトに行ったほうがいいんじゃないの？」

「うん、そうだね。じゃあまた学校で」

そう言って手を振ってから有紗は去って行った。

また学校で。その有紗の言葉が現実になるのは思っていたよりも早く、次の日にはその日が訪れた。

講義が終わり、教科書やプリントを鞆に片付けながら話していると

「こんにちは」

と声を掛けてくる人物がいた。

「有紗ちゃん」

途端に裕也が嬉しそうになる。

「まさか有紗ちゃんから声を掛けてくれるなんて、俺嬉しいよ！」

「また学校で、って言ったしね」

そう言って裕也の隣に鞆を降ろす。

「皆は違う教室？」

「うん、これから移動しようかって」

「そっか。じゃあ今までもすれ違ってたのかな。私は次ここだから」

有紗はプリントを取り出し準備を始める。

「あたしたちも行くわよー」

声を掛けて教室を出ようとする夏姫。

「ちよつと待って！ あ、有紗ちゃん。この後ってまたバイトだったりする？」

「うん、バイトだけど。でも今日はちよつと遅めの時間だからちよつとだけなら大丈夫だよ」

「じゃあまた話しよ。連絡先教えておいてもいいかな？」

未だに話し続ける裕也を呆れた表情で見ていた夏姫が行動に出る。

裕也の持っていた鞆を引つ張り

「ほら、早く行かないと放つていくわよ。つていうか、来ないともう相手してあげない」

「ちよつ、それは勘弁！」

慌てた裕也の鞆を更に引つ張る夏姫。

「じゃあ早く来なさい」

「わかったつて！ 有紗ちゃん、また後で！」

最後に有紗に声を掛けて、騒がしかった裕也たちは教室を出て行った。

次の講義の教室に入ってから、夏姫は不機嫌だった。

「なあ、なんで怒つてんだ？」

理由がわからない裕也が夏姫にストレートに訊ねる。しかし素直に答える気がない夏姫は

「別に怒つてないから」

と一蹴するだけだ。

そんなことをしていると教授が部屋に入ってきて講義が始まってしまふ。

裕也は講義中も夏姫のことが気になるようでチラチラと夏姫の様子を伺っていた。そのせいであまり話を聞いていなかったのか、教授から話を振られても答えることができず注意を受けてしまう。そんな裕也を夏姫は呆れ顔で見つめるのだった。

その後、有紗と連絡を取り合った裕也に連れられ、大学構内の休憩スペースに四人は来た。しかしいつまで待っても有紗は現れない。

「本当に来てくれるつて？」

「うん、そうメッセージが来た」

と古都香の問いに裕也が証拠のメッセージを見せてくれる。そこには『分かりました。それじゃあそこで待っていてください』という丁寧な文面が綴られていた。

それから数分間、四人はそれぞれ携帯を見て過ごす。その空間には四

人しかおらず、静かな時間が流れていた。

と、そこに待ち人が現れる。

「お待たせしました。講義が長引いちゃって、ごめんなさい」

急いで駆けてきた有紗はべこりと頭を下げる。

「いいのいいの。それより来てくれてありがとね。この後バイトだつて言つてたよね？ 時間は大丈夫？」

有紗は小さな腕時計で時間を確認してから

「えっと、あと少ししたら向かわないといけなかも……」

「どこでバイトしてるの？」

「えっとね……」

伝えられた場所は、先日有紗と出会った店の近くだった。

「あの辺りに喫茶店があつてね、そこで店員として働いてるんだ」

その言葉に、ずっと携帯に視線を落としていた夏姫が顔を上げた。

「それってパンケーキの種類が多いところ？ 確か最近できたんだよね」

「うん、そうだよ。二か月前くらい、かな」

「ならそこ知ってるわ。行ってみたいと思つてたのよね」

今まで不機嫌顔を隠しきれていなかった夏姫がやんわりと笑顔になる。そんな夏姫に有紗が提案した。

「じゃあ今から一緒に行きませんか？ 私の奢りつていうのはできないけど……」

「奢つてもらわなくてもいいわよ。裕也が有紗ちゃんに絡みまくつた迷惑料つてことで全部支払うから」

「な、迷惑料つて！」

夏姫に抗議しようとする裕也をうまく躲す夏姫に笑いながら、有紗は頷く。

「そういうことなら一緒に行きましょう。裕也くんの奢りで」

にっこりと笑いながら言う有紗に、「迷惑してたのか」と項垂れる裕也がいた。

有紗に連れられて行った喫茶店は古都香も見たことのある店だった。オシャレな外観は一見すると女性向けのように感じられる。しかし中を

覗くと男性客の姿もあった。有紗とは店の前で別れる。有紗は従業員が使う裏口から入るからだ。こじんまりとした店内にはカウンター席とテーブル席があり、古都香たち四人はテーブル席へと通された。

座って待っていると、四人の元に喫茶店の制服姿の有紗が現れた。

「いらっしやいませ」

にこつと笑う有紗に、裕也も奏人も目が釘付けになっていた。しかしその気持ちもわかる気がする。

まるでメイド喫茶にいるメイドさんのようなピンク色と白色のエプロン姿の有紗は、元々の可愛らしさも相まって更に可愛さが増していた。もしかしたら男性客の中には有紗に会うのが目的で来店している人もいるかもしれないと思える。

「有紗ちゃん、可愛い」

思っていることを言葉にした裕也は頬が少し赤くなっているような気がする。奏人はただひたすら有紗を見つめていた。

そんな二人を見て、隣に座っていた夏姫が古都香にだけ聞こえるような小さな声で呟く。

「やっぱりこんなに可愛い女の子が好きなのかしら」

古都香はそれに答えることができなかった。

注文を終えた四人はすぐさま有紗の話になる。

「有紗ちゃん、すっげえ可愛かった!」

「そうね」

興奮気味に話す裕也に夏姫が短く返す。それに古都香が付け加える。

「奏人もずっと見てたもんね」

「そ、そんなことないで!」

慌てて首を振る奏人だったが、ずっと有紗を見つめる奏人を見ていたのだから事実だ。

「見てたよー。だって、ずっと奏人を見てたもん」

「えっ……」

古都香は言ってから気づいた。なんだか恥ずかしいことを言ってしまったような気がする。

「あのっ、見てたのはちょっとだけ、だから……」

「そ、そうやんな……」

二人がお互いに恥ずかしがってしまったため、なんだか変な空気になってしまふ。

そこに有紗が注文した飲み物を持ってきてくれた。空気を変えるため、無理やり飲み物の感想を言う。

「このホットチョコ、すごくおいしいよ」

「お、俺のコーラもおいしいで」

そんな奏人に裕也が冷静に突っ込む。

「コーラはどこに行っても同じような味だと思うぞー」

「マジか!」

そんなやり取りを、紅茶に入れたミルクをストローでかき混ぜながら見ていた夏姫が呟く。

「あんたたちって、素直よね」

それに古都香が訊ねる。

「素直って?」

「全部表情と言葉に出まくり。悪い人にすぐに騙されるタイプじゃない?」

「それはやだなー」

「俺も困る……」

夏姫の言葉に、古都香も奏人も困り顔になる。それを見た夏姫が笑いながら指摘する。

「二人とも、同じ顔してるわよ。あんたたちって似てるし、素直だし、仲良いし。なんだか羨ましいな」

最後にはなぜか寂しそうになった夏姫を三人は見つめた。そんな空気を敏感に察した夏姫が苦笑いで言う。

「なんかあたしのせいで変な空気になっちゃった? なんかごめんね。」

「なんかごめんね」

「気にならないで」

夏姫は空気を変えるため、メニューを取り出して

「ほら、裕也の奢りなんだからなんか食べちゃお。特に古都香は一人暮らしなんだから、食費が浮くわよ」

「それ助かる! 裕也くん、ごちそうさまです」

「やっぱり俺の奢り!? それは有紗ちゃんが迷惑してなかったら良いんだよね?」

「裕也、うるさい」

夏姫と裕也が騒ぎ始めた隣で、古都香の正面に座っている奏人が声を掛けてくる。

「古都香、なに食べたい? 俺はこのパンケーキがいいかな」

「奏人、苺好きだもんね」

奏人が指さしたのは苺がたっぷり乗ったパンケーキだった。古都香はチョコがたっぷり乗ったパンケーキを指さす。

「じゃあ、私はこれ」

「古都香はやっぱりチョコなんやな。飲み物もチョコやのに」

「だっておいしいんだもん」

そんなやりとりをしていると、有紗がやってくる。

「なんだか楽しそうだね」

それに気づいた夏姫が有紗に謝った。

「あたしたちうるさいよね、ごめん」

「ううん、店長も楽しい四人が来たねって笑ってたよ」

「ならよかった。これからも食べに来るね」

夏姫の言葉に一同頷くのだった。

※ ※ ※

「っていうことがあったんだ」

天界で、古都香は現での出来事を少々端折った部分もありながら話した。

古都香が現に行くと、主に紫苑が現の話を書きたがるようになった。紫苑や紫楓もその話を楽しそうに聞いてくれる。だから古都香も現で起こったことはなんでも話すようになった。

「相変わらず、お前らは仲が良いな」

紫苑がそう言ってくれて嬉しくなる。彼らは古都香の大切な友だちだから一緒にいるのが楽しいことが伝わっているのが嬉しい。

「いっつも他愛もない話ばかりだけどね」

と笑う古都香に、紫苑が再び擦り寄ってくる。

「オレも甘い食べたい」

「甘い? あるかな?」

古都香は何度も天界に訪れるうちに天界にある店はだいたい覚えてきた。しかし甘いもの、紫苑が言っているのはパンケーキのようなデザート系だと思うが、それが場所知らない。

そんな古都香に紫苑が答えた。

「確かマツチャっていうのを使った店があったと思うよ」

「抹茶があるの?」

「抹茶があるの?」

食べたがっていた紫苑よりも古都香が先に反応してしまう。飲むのは

苦手だがデザートで使われているものなら大好きだ。

「古都香さん、好き?」

「うん、大好き!」

「オレも食べたい」

紫苑も参加してくる。

「じゃあみんなで行こうか」

紫苑の提案に一人、乗り気でない人物がいた。

「俺は待ってるな」

紫苑の言葉に前のめりになって異を唱える。

「一緒に行こうよ!」

「兄貴も一緒が良い!」

「って言ってるけど、どうするの?」

真剣に誘う二人に紫苑は笑い、紫苑は困ったような表情になる。そして諦めたのは紫苑だった。

「たたくしゃーねえな。でも俺甘いもん苦手なだけだ」

と言いながらも紫苑も来てくれることになった。

いつも歩く街を四人で進んでいく。

「古都香ちゃん、今日は三人と一緒になんだねー。せっかくだからこれ持っていきなよ」

そう言って最近話すようになった女性が店先で果物をくれた。見た目はリンゴみたいで真っ赤で丸く、でも甘さは少なく柑橘類のような味があるのが特徴だ。

「ありがとうございます！ 今度なにか持つてきますね！」

恐らく女性は古都香が人間だということを知らない。古都香も彼女が神なのか鬼なのか最近まで知らなかった。紫苑に彼女が鬼だと教えてもらったのだ。それを知ってから、古都香はたまに現の果物やデザートを持つてくるようになった。

この世界にも少しずつ知り合いが増えてきた。だが、古都香には彼らがどちらの種族かわからない。だが本人たちにはわかるようだ。でも古都香は種族なんて関係ない、と思い始めるようになっていた。どちらか知らなくても、仲良くなつてしまえば同じだから。そんな風に思い始めると、天界で過ごす時間が以前よりも楽しく思えるようになった。

紫楓が先頭を歩き、彼らは細い通路に入った。紫楓、紫苑、古都香、紫鬼の順でどんどん歩いていく。やがて通路を抜けると、そこには新たな街の景色が広がっていた。そこも親しんだ街と同じく、縁台が置かれた店がいくつも並んでいる。

「ここは初めて来たな！」

と辺りを見回していると、紫楓に呼ばれた。そこに向かうと、これも時代劇で見えるような外観の店だった。勿論縁台も店先に置いてあり、ここでは女性が二人並んで座つてみたらし団子のようなものを食べていた。

「ここだよ。さあ、入ろうか！」

紫楓に連れられ、三人は店に入る。

店内はまるで現の喫茶店のようだった。テーブル席がいくつも並んでいる。古都香は天界で食事をする店に入ったことが初めてで、てっきり畳で正座をするものだと思つていたので驚いた。

四人は奥の席に通された。隣に座つた紫苑にメニューを渡され、中を見る。そこにはみたらし団子と書かれたものが本当にあり、他にもホットケーキやパフェなどのメニューが平仮名で書かれていた。

「ここって、天界よね？」

思わずそう訊ねる。あまりにも現の喫茶店のようで、実はここは現な

のではないかと錯覚しそうになる。

「そうだよ。この店は現を意識して作られたみたい。だから現に行けない鬼は勿論、現が大好きになった神もよく来るんだって」

そう言われて辺りを見回す。彼らが神なのか鬼なのかはわからないけれど、この店には男女関係なく客が多い。それに並ぶことはないものの、次々と客が入れ替わっている。

「現つてこんなに人気なんだね」

「オレも行きたい。でも行けないから古都香が来てくれるのが嬉しい」

ぎゅつと手を握つてくる紫苑。それだけではなく、腕に絡みついてきてすり寄つてくる。なんだか最近紫苑のスキンシップが激しくなった気がする。

「私も紫苑くんに会えて嬉しいよ。でもここは外だから程々にしようね」

そう言つて押し返すと紫苑は口を尖らせ、上目遣いで見つめてきた。

古都香はつい紫苑を甘やかしてしまいそうになるのを堪え、話を戻す。

「ほら、紫苑くんはなにが食べたい？」

興味がすぐに食べ物に移つたようで古都香の手元にあるメニューを覗き込む。

「古都香が言つてたのつてどれ？」

「パンケーキのことかな？」

「うん」

メニューの端から端までをゆつくりと見る。しかしパンケーキという文字は見つけられなかった。

「パンケーキはないみたいだね。代わりに、同じようなホットケーキならあるよ？」

「じゃあオレはそれにする」

紫苑の食べるものが決まつて、今度は古都香がなにを食べるか考え始める。暫く悩んだ末に古都香が決めたのは

「私は抹茶のパフェにしようかな」

紫楓から抹茶を使ったものがあると聞いてから、ずっと抹茶を食べたいと思つていた。その中でもパフェが一番に目がいったためにそれを選ぶ。

「紫鬼さんと紫楓くんはどうする?」

と二人にメニユーを見せる。

「俺はいいよ。甘いの手手だつて言ったろ」

そう言つて紫鬼はメニユーを紫楓に渡す。紫楓は少し悩んだ上でメニユーを指差した。

「じゃあ、僕はこれにしようかな。お腹も空いてるし」

紫楓が指差したのはパフェだった。しかし古都香が選んだものとは違い、「特大ばふえ」と書いてある。その下には小さな文字で「二人以上でお召し上がりください」と書いてある。

「これ、二人以上つて書いてあるけど、誰と食べるの? 私たちはもう選んじやつたし……」

古都香の心配をよそに、紫楓は言った。

「これは僕が一人で食べるんだよ」

「え、一人……?」

思わず訊きかえすと、紫楓は頷く。

「まあ紫楓なら大丈夫だろうな」

「おにいなら平気」

紫鬼と紫苑が口々にそう言う。それなら、と三人分のデザートを注文した。

それはすぐに運ばれてきた。

古都香の前にはたつぷりのクリームが乗った抹茶のパフェが置かれる。抹茶のキーキやアイスがトッピングされ、本当に現で食べるパフェとそっくりで少々驚く。

紫苑の前にはホットケーキ。熱いホットケーキにシロップをたつぷりとかけ、その脇にはアイスがトッピングされている。

そして紫楓が頼んだ特大パフェはテーブルの中央に置かれた。古都香のパフェが喫茶店でよく見るパフェの大きさ、紫楓が頼んだのはその倍以上の大きさがあつた。メニユーに「二人で」と書かれていたように、皆で食べるように真ん中に置かれたのだろう。四人分の取り皿まで置かれる。紫楓は店員が去つた後、その特大パフェを自分の元に寄せた。

「いったんさまーすー!」

紫楓は古都香が見守る中、意気揚々と食べ始める。細い体のどこに入るのかと思うくらい、どんどんパフェに乗つた甘いものが消えていく。紫鬼と紫苑はそんな紫楓を全く気にした風でもない。

紫楓がひたすら食べ進めるパフェを見つめながらも古都香は自分のパフェを食べ始める。

紫楓がそのパフェを完食するのは古都香が自分の抹茶パフェを完食した僅か数分後だった。

特大パフェを一人で完食した男がいる。それが喫茶店の中で知れ渡るなど、造作ないことだった。

喫茶店にいた神も鬼も見つめる中、会計を済ませて帰っていく四人組。それを見つめていると、彼の耳に一人の名前が聞こえた。

——古都香。

確かにそう聞こえた。それは四人組の中でも唯一の女性を指す名前で、パフェを完食した男に注目している他の客にとつてはなんてことのない名前だった。

しかし彼にはそれは違った。

古都香、という名前を聞いて彼はあることを思い出す。そして人知れず呟いた。

「(とちゃん……?)」

※ ※ ※

金曜日の放課後には天界に出掛けることが多くなつた古都香にとつて、現の友人と出掛ける時間は少しずつ減ってきていた。だからといって出掛けないわけではなく、放課後には裕也のバイトまでの時間潰しに付きあつたり、休日にも遊びに出掛けたりしている。

現と天界では時間の流れ方が違うらしいからだ。確かではないが現の方が天界よりも時間が早く過ぎていくと考えている。最初に天界を訪れた時のことが考えるきっかけだった。それから天界に向かう時には時間を確認していくことにしたのだが、結局天界で過ごす時間が楽しくて

時間を忘れてしまい、確実な結果は出ていない。

そんな中でも、古都香はおおよその見解を出すことに成功した。それは現の方が天界よりも約三倍の速さで動いているということだ。それは腕時計の針が天界ではほんの僅かにしか動いていなかったことの証明にもなる。

その考えが正しいかどうかは別としても、古都香は現の方が時間の流れが速くて良かった、と思うようになっていた。なぜなら古都香が現で大学に通ったり友人と出掛けて天界に行けなくても、天界に住む紫鬼たちからすれば数日しか過ぎていないからだ。だから古都香は現で過ごす時には思い切り楽しむことができた。ただ天界では時間を気にしなければならぬわけだが。

そんな古都香は今日は夏姫と有紗と三人で出掛けていた。いつもは奏人と裕也も一緒だが、たまには女子会というのも悪くない。

今日三人が向かったのは学校から近いところにあるアクセサリーの店だ。有紗の行きつけの店らしく、そこには有紗に似合うような可愛いものから、夏姫が好みそうなクール系のものまで、色々なものが綺麗に置かれている。ネックレスやピアスは壁に、指輪やブレスレットは棚に置かれている。その一角にはパワーストーンもあり、自分で好きなデザインのものを作れるようだ。

古都香は普段あまりアクセサリーをつけることがないため、辺りを見回しながら順に見ていく。その間にも夏姫と有紗は好きなものを夢中になって見ていた。

古都香がブレスレットを見終わった頃、有紗が一人の女性店員と話していることに気づいた。

「あ、古都香ちゃん。ここの店員さんだよ」

近づいていくと、古都香に気がついた有紗が店員を紹介してくれる。どうやら有紗が初めてこの店を訪れた時からほとんど仲良くなったらしい。

そこに夏姫も加わり、四人で話し始める。その内容は様々で、店頭にあるパワーストーンのことや夏姫のピアスのこと、その流れで奏人と裕也のことも話した。

明るい店員と話していると、あつという間に時間が経ってしまう。古都香は一人でも訪れてみようかと思いつきながら店を後にするのだった。

※ ※ ※

喫茶店で紫楓が特大パフェを完食したあの日から、なぜか古都香も街で声を掛けられるようになった。それも完食したのが古都香であるという誤解つきで。

だからその時も、その話だと勘違いしてしまった。

「あの……」

「はい、なんででしょうか？」

古都香に声を掛けたのは、自分と同じ背丈の男の子だった。長い前髪のせいで殆ど隠れてしまっている鮮やかな緑色の瞳で見つめてくる彼は、なんだか緊張した様子に見えた。薄緑色の着物をぎゅっと握っている。

「こ、この間茶屋であなたのことを見て、それで……」

ここまで言われて、古都香は思った。きっと彼も紫楓と間違えて声を掛けてきたのだろう、と。だから古都香はこう答えた。

「実はあれは私じゃないんです。私と一緒にいた男の子がパフェを全部食べたんですよ」

「……ばふえ？」

「……ええ？」

男の子が首を傾げ、古都香も理解ができずに首を傾げる。

「えつと……俺が知りたかったのはこちゃんのこと……」

その瞬間、古都香の脳内には奏人の姿が浮かんで消えた。

「こちゃんって……」

古都香をこちゃんと呼ぶのは奏人だけだ。だがその彼も今では古都香のことを呼び捨てにしている。だから古都香をこちゃんと呼ぶ人はいないはずだ。それに天界には古都香がこちゃんと呼ばれていたことを知っている人がいない。

「どうして私がこちゃんって呼ばれていたことを知ってるんですか？」

それは率直な疑問だった。だが彼にとつてはその疑問は意味を持つものだったらしい。

「やっぱりあなたがこちゃん!？」

彼は興奮気味に古都香に詰め寄ってくる。古都香はただ困惑するだけだった。

「えっと、私ってあなたと会ったことありましたっけ……?」

これで会っていたと言われてしまえば、それはかなり申し訳ないことになる。だから会ったことがないのを期待して訊ねたのだが

「んーと、いつになるのかな。俺がかなり前に現に行つた時で……。あ、そうだ、確か人間には年齢っていうのがあるんですね? こっちゃんは今何歳ですか?」

「十八歳、です」

「じゃあ……現では十年くらい前になるのかな。うん、たぶんそれくらい前。その時に俺たちは会ってるんです」

と言われてしまった。

十年くらい前と言えば、古都香が京都から東京へと引越した辺りだろうか。しかし古都香には京都でも東京でも彼と出会った記憶はない。

「ごめんなさい。私、あなたと出会ったこと覚えてなくて……」

隠しても仕方がない、と正直に話す。

「そっか……。それは残念だな」

しょんぼりと肩を落とす男の子に申し訳なき膨らんでくる。

「もし良かったら、その時の話を聞かせてほしいんですけど……」

と古都香が提案すると

「勿論! 喜んで!」

と先程までの落ち込みはどこへやら、人懐っこい笑顔を向けられた。

こんなことをしていたら、また紫鬼に注意しろと怒られてしまうなんて思いながらも彼に連れていかれたのは、紫楓が特大パフェを完食したあの喫茶店風のお茶屋さんだった。二人は小さなテーブル席へと案内される。

お互いに飲み物だけを注文し、早速話を始める。

「俺は陽はるです。これからよろしく」

「私は四宮古都香です」

陽に差し出された右手に応える。陽は嬉しそうに「古都香だからこっちゃんなのかあ」なんて言っている。

「こちゃんが覚えてなくてもさ、俺らは一回会ってる訳だし敬語とかはやめようよ」

「いい、のかな?」

「勿論! 是非俺と仲良くしてくれると嬉しいな」

陽は人懐っこい笑顔を古都香に笑いかけた後

「それじゃあ、俺とこちゃんが出会った時のことを話そうか」

と言つて話し始めた。

※ ※ ※

陽はその時、天界へ帰るために山へと訪れていた。そこにある鳥居を潜るためだった。だがその時、女の子の声が聞こえた。陽は鳥居に素早く潜れば良かったものの、その時は咄嗟に木の陰に隠れた。

そこに声の主である女の子が走って現れた。女の子の背後からは、姿が見えていないものの幼い男の子の声も聞こえてくる。でもまだ声は小さく、場所は遠そうだった。声からして二人は追いかけてこをしようだった。陽は女の子が心配だった。足場は決して安定しているわけではなく、足を滑らせてしまえば大変なことになるかもしれないと思つたからだだった。

それでも陽はじつと陰に隠れたまま、様子を伺っていた。自分の姿は見えてしまうが鳥居は見えない。そのためこのままじつと待っていればすぐに去ると考えてのことだった。

女の子は辺りを見回した後、再び走り出した。その時、女の子は小さな悲鳴と共に足を滑らせた。陽は咄嗟に手を伸ばしたが届かず、女の子は少し下へ落ちてしまう。そこは大人から見れば簡単に着地できる高さでも、幼い少女から見ればかなりの高さの場所だった。

陽は自分の姿が見られるかもしれないという考えを無意識に捨て、女の子へと駆け寄った。女の子は目を閉じていた。そつと抱き抱えると、

手のひらに僅かに血がついた。それだけで彼女が怪我をしてしまったこととは明らかだった。

陽は考えた。どうしてこうなってしまったのか、と。答えは簡単だった。自分が、走る少女を危険だとわかっていながらも止められなかったから。今この場所で少女を止められたのは自分だけだったのに。

その結論に至った時、陽は女の子を傍らに寝かせた。そして彼女に手を翳す。少し手のひらに力を込めると、薄明かりの膜が現れ、女の子を包んだ。そのまま数秒、じっと待つ。そして手のひらについてしまった少女の血がスッと消えた時、陽は力を抜いた。それからもう一度少女を抱き抱える。もう手のひらに血はつかなかった。

もう大丈夫だと思った陽は、崖の上に女の子を寝かせて去った。でもやっぱり心配だったから先程の木の陰に隠れた。少しすると、小さかった男の子の女の子を呼ぶ声が大きくなり、やがて現れた。

男の子は少女の姿を見つけるとすぐに駆け寄った。

——ことちゃん！ ねえことちゃん、目を開けてよ！

焦った男の子は見ていて可哀想だった。だけど陽にはこれ以上どうすることもできない。ひたすら見守ることしかできなかった。

——ことちゃん！？

男の子の声色が焦り一色だったものから変化した。それで陽は気づいた。女の子が目覚めたことに。

男の子は思わず泣き出しながら抱きしめた。苦しいよ、なんて言いながら女の子は笑っていた。陽はその様子に、もう大丈夫だと思った。そして天界へと戻るために鳥居を潜った。

だが、それからどれだけ経ったのかもわからなくなった頃、陽は他の神と話をしている唐突に思った。もしかしたら、あの日の女の子になにかしらの影響が現れているかもしれない。だが女の子がどこにいるのかもわからず、それを確かめる術もない。だけどずっと気になっていた。彼女が「ことちゃん」と呼ばれていることだけが彼の知っている女の子の情報。それを忘れないように覚え続けていた。

そして喫茶店で「ことか」という名前を聞いた時、もしかしたらと思った。だが彼女がああするときの「ことちゃん」である確証はなかった。それ

でもこの機会を逃したくはなかった。だからかなり緊張したものの声を掛けることに成功したのだった。

※ ※ ※

陽は話を終えた後、途中で運ばれてきていた緑茶を一口啜る。

山から滑落した古都香の話。それを聞いたのは二回目だった。一度目は奏人からだ。だけど、その話を二回も聞いたというのに古都香にはその時の記憶がなかった。

「陽くん、私その時のことを覚えてないの」

「本当に？」

「うん。実は奏人……あの時私と一緒にいた男の子からもその時のことを聞いたんだけど、その時もピンとこなかったんだよね。私のことを助けてくれたのに、それだけじゃなくてずっと気にしてくれていたのに、ごめんね」

どうして忘れてしまったのか。古都香はそれだけが気になっていた。だがその答えは当然見つからない。だがそんな古都香に意外すぎる言葉が返ってきた。

「もしかしたら、その時の記憶がないのは俺のせいかもしれないね」

「どういふこと？」

陽はにっこり笑顔を真顔へと変えて言う。

「俺は神だ。それからことちゃんは人間。本来なら俺たちは交わることのない存在なんだ。俺たちが現に行っているのは、現の現状を理解して管理すること。まあ実際は現を楽しんでるだけだけど」

と苦笑いしてから続ける。

「交わることのない存在が人間と交わった場合、俺たちはなにか処置を施さなければならぬ。そうしないと、人間に俺ら神の記憶が残ってしまふからね」

古都香は率直な疑問をぶつけた。

「記憶が残っちゃだめなの？ 交わることのない存在っていうのは理解できるんだけど、私たちがあなたたちを神だっってわかってなければ問題

ないように思えるの」

「確かに記憶を持つていること自体は問題ないよ。ただ俺らが問題視しているのは、人間についてだ」

古都香には陽の言葉の意味がよく理解できなかった。それを首を傾げることで伝える。

「天界と現を行き来するだけのことちゃんには難しい話、だよ。えっと、ことちゃんは天界での話を現でしたことはある？」

「ううん、ないよ。話してみてもいいかなって思ったりもしたんだけど、信じてもらえない気がしたから」

それを聞いた陽は安心した顔を見せた。

「それなら良かった。実はことちゃんが現でのこと、俺たち神とか、ことちゃんが仲良くしてる鬼の話をしてたらどうしようかと思っただんだ」

陽は少し黙って思案してから口を開いた。

「例えば、ことちゃんが天界で過ごした日のことを現で誰かに伝えたとするよ。それを信じてもらえなければそれで良い。でも、もしも信じてもらえたら。そしたらことちゃんが伝えた人が別の人に伝えるかもしれない。そうやってどんどん天界でことちゃんが過ごした日々が伝達していき、やがてそれは現中に広がってしまう」

「それは考え過ぎだよ、陽くん。私の発言にそこまで影響力があるとも思えないし」

だが陽は首を横に振った。

「可能性はゼロじゃない。ゼロじゃない限り、俺たちは対処し続けなくちゃいけないんだ」

「そっか、そうなんだ。じゃあ、どうして現で天界のことが広まるのがそんなにいけないことなのかな？」

「簡単な言葉で説明するのは難しいんだけど。えっとね、俺たち神はあくまで現を管理することが仕事なんだ。現では普段からたくさん問題が起きてる。だけどそれらは全部人間が自分たちで解決することができる問題だ。人間の力は自分たちで思っているよりも大きなものだからね。だけど人間にはどうにもならない問題が起こる。こともたまにある。それは人間が知らない間に、俺たち神が対応しているんだ。だからそれ

についてことちゃんは知らないし、他の人間もその問題については知らない。絶対にね」

陽はそこで話を区切ると、緑茶を一口啜る。

「ことちゃんはここまででは理解できたかな？」

「うん、大丈夫」

「じゃあ次の話。これもまた考え過ぎだつて言われちゃうかもしれないんだけど。人間に天界のことが知られたら、必然的に神の存在を知られることになるよね。それから俺らが今まで対処してきた問題についても。でもここで危惧しているのは問題について知られることじゃない。問題を解決する俺らの力についてなんだ。こんなことを言うと、人間を信頼していないと思われるかもしれないし、実際に人間の心の部分を信頼している神はあまりに思わないけど。人間は利用できるものは利用しようとするよね。それが後にどんな悪影響を起こそうと構わないとばかりに。そんな人間ばかりじゃないと俺は思う。でもそんな人間がいるから俺らが対応しないといけない問題が起こるんだよ」

「待って、私たちが知らない間に陽くんたちが解決している問題についてのは、人間が引き起こしてるの？　じゃあ神様がいなくちゃ……」

古都香はその後の言葉が続けるのを躊躇った。怖く感じてしまったからだ。だけど陽は構わず、古都香が言おうとした言葉を言った。

「そうだよ。俺らがいないと人間はとつくの昔に滅びている。人間は俺らの力に頼って生きてるんだ」

その声は冷たかった。あのにつこりと笑った陽の暖かさは、そこにはなかった。

「世界はただそこに存在しているだけだ。人間がいるから現があつて、神がいるから天界がある。人間がいないと現は存在していないし、神がいないと天界は存在していない。だから、この世界を守ろうと滅ぼそうと、それは自分たちがどうだつてすることができる。だけど人間には俺らのように世界を守る力はない。俺らが人間を見放せば人間はすぐに絶滅するよ。そうだね、もしかしたら今日にでも滅ぶかもしれない」

背筋が凍るのを感じた。表現することのできない不安と恐怖を感じた。「じゃあ……現で天界について広まっちゃいけないのは、その怖い事実

を知らされないため？」

「それは違うよ。言ったでしょ、俺たちは人間を信じてはいないって。人間が俺らのことを知ったら、きつと人間は神を捉えようとするよ。そして俺らの、人間にはない力を利用してしようとする。でも彼らに力の正しい使い方なんてできないよ。力を暴走させて、自分たちではどうすることもできない問題が起こるはずだ。でもそうなったらきつと俺たちにもどうすることもできない。後は簡単だ。今は滅びる。今まで現を守ってきたその力で、自分たちが生きてきた世界を滅ぼすんだ。ことちゃんは今の話を考え過ぎだと思おう？」

古都香は一瞬考えてから頷いた。

「考え過ぎだと思おう。私は人間を、そんなことはしないって信じたい。……私人間だからそんな風に考えるのかもしれないけど」

「そうだね。ことちゃんが人間を信じたい気持ちにはわかるよ。それに俺もそこまで人間を見下しているわけではないしね」

そうして陽はやつと笑顔を見せてくれた。先程までの冷たさは感じられない。その笑顔を見てみると、古都香はふと思つたことがあつた。

「今の話、私にしても良かったの？ 神様が心配しているのはあなたたちの力の話が現で広まることでしょ？ それなのに全てを話しちゃつて、本当に良かったの？ 私は今の話を広めるつもりはないけど、忘れることはできないよ」

「うん、そうだね。そこはことちゃんを信じるしかないかな。それでことちゃんが山で落ちた時の記憶がないっていう話なんだけど」

それを聞いて古都香は話のきっかけを思い出した。

「うん」
「ことちゃんの中から記憶がなくなったのは、俺らの力が知られないように処理されたから。ことちゃんは俺の治癒術を受けて今ここにいるんだ。だからことちゃんには記憶を消す処置が施された。俺がやつたんだけどね。でも俺の処置は甘かったみたいだね」

陽はまるで悪戯を咎められたような顔をする。

「別に記憶がないならそれで良いんだけど、本当ならことちゃんの中には別の記憶が組み込まれたはずなんだ。記憶を消すだけだとどうしても

あちこちで矛盾が生じるから、別の記憶を代わりに入れることにしてるんだよ。でもことちゃんには別の記憶すらもない。それに幼馴染の……奏人くんだけ？ 彼の記憶は消えてないんだよね？」

「うん、はつきりと覚えてるような感じだったよ」

陽は困つた表情を浮かべて唸る。

「んー、それはちょっと困るかな……。でも彼は天界のことを知らないし、俺のことも知らないから……。あつ、俺のことを知らないから記憶がそのまま残ってるのか！」

勝手に解決してしまった陽を見つめる古都香。

「奏人くんは俺のことを見たわけじゃないんだ。俺は咄嗟に隠れちゃつたからね。だから奏人くんの記憶から俺のことだったり天界の記憶を消す必要はないんだよ。だからことちゃんが怪我をして倒れた事実とその一連の出来事は残ってるんだ。だから俺が姿を見せていれば、奏人くんの中から記憶を消すことが出来たのかな」

「でも奏人から記憶がなくなつたら、私はここに來ることができなかつたよ。だから良かったつて思う」

陽はその言葉聞いて微妙な表情を浮かべる。

「実はそれが一番大きな問題なんだ……」

「私が天界に來たことが？ どうして……。あつ、私が天界のことを知つたから、さつき陽くんが話してくれたみたいなのが起るつて心配なのか」

「それもそうなんだけど、ことちゃんはとうやってここに來たの？」

「えつと、昔私が山で落ちたつていう話を奏人から聞いて山に久しぶりに行つたの。そこで不思議な鳥居を見つけたんだ。それを潜つてみたらここに來たつてわけ」

「それだよ。鳥居が見えたつてことが問題なんだよ。本来なら人間は俺らが作つた鳥居を見ることなんてできないんだから。たまに鳥居を見ることが出来る人もいるつて聞いたことはあるけど、ことちゃんの場合はそれは違うと思う。たぶん、俺が治癒術を施したからだよ」

そう言うつと陽は項垂れた。

「私、もうここにはいない方がいいね……」

古都香の呟きを聞いた陽は真剣な表情で訊ねる。

「ことちゃんは天界が好き？」

「うん、好きだよ」

「現も好き？」

「うん、好き」

「じゃあさ、さつき俺が話したこと、誰にも言わないって信じてもいい？」

「うん、いいよ。その確認は話す前にした方が良かったと思うけどね」

陽の表情が和らいだ。

「そっか、そうだね。……ことちゃん、ことちゃんは特別だよ」

なんと答えればいいのかわからなくて一瞬黙った。その際に、陽は続ける。

「ことちゃんがここにいることを、俺は認める。俺は神の中でも権力なんて全然持ってないけど、それでも俺が認める」

「いいの？」

「うん、だって好きなんですよ？ 現も天界も好きなんですよ？ だってらどっちも愛せばいいよ」

そう言う陽は、まるで太陽のように眩しかった。

その後、店を出た二人は街を歩いていった。

古都香は初めて天界で夕焼け空を見た。

「ここも日が暮れるんだね」

「一応太陽みたいなのがあるからね。もしかして夜には来たことがなかったの？」

「うん、いつも明るい時に来てたんだ。だから夜なんて来ないと思ってたんだけど」

夕焼け空は奥に行くほど暗くなっている。太陽と闇の間の空は紫色になっっており、綺麗だと思っただ。

「ここには暦はないけど一日はあるよ。一日があるっていうことは、朝から始まって夜で終わるんだ。……ことちゃんは本当に特別なんだね」

「私が特別かあ。なんか変な感じだな」

自分のことは平凡だと思っていた。その感覚は天界に来て、どれも

け陽に特別だと言ってもらってもなくなるわけではない。でもなんだか、くすぐったいような感覚にもなった。

「変じゃないよ。ことちゃんは特別だよ。だってこの天界に馴染めちゃうんだもん。ここは神と鬼が暮らす場所なのにさ」

「それはきつと現にもあるものがあるからだよ。それにこの人たちの生活は私たちと似てるの。それが感じられたから馴染みやすかったのかもしれない」

古都香は辺りを見回す。店先に立つ人、その人に声を掛ける人。彼らはここで生きている。人間と全く変わりなく、生きている。神だからといって全てがうまくいくわけではない。鬼だからって決して恐れられる人ではない。それが古都香にとっては大切なことだった。

「やっぱり人間っていうのは凄いのかな。それともことちゃんが凄いのかな」

「陽くん、私のことを凄いか特別かって言ってくれるけど、私は普通だよ。普通の人間だし、得意なことも特にならない。だから凄いわけじゃないよ」

それに陽は首を振る。

「ことちゃんは俺にとっては特別なんだよ。それでいいんだ」

「そっ、なのかな」

「そっだよ」

二人で話しながら歩いていると、やがて古都香のよく知った道に出た。そこにはいつも紫鬼たちが買い物をしている店が多くある。古都香は紫鬼たちがどこかにいないかと辺りを見回した。そんな時、背後からよく知った声が聞こえる。

「なにをきよろきよろしてるんだ？」

振り返ると、やはりそこには紫鬼がいた。その後ろには紫楓と紫苑もいる。紫苑は古都香の姿を見つけると

「古都香！」

駆け寄ってくる。そのまま胸に飛び込んでくる。その様子を陽は驚きの表情で見つめている。

「彼氏いるんだ」

と呟く陽に慌てて言う。

「違うから！ 紫苑くんはただの友だちだから！」

それを聞いた紫苑が不思議そうな表情で言う。

「そうなの？」

「そうでしょ！？」

どうしてこんなに紫苑は積極的になったのだろうか。古都香は思わず頭を抱えなくなった。

そんな三人のやり取りを見ていた紫鬼が訊ねてくる。

「古都香、そいつは？」

「神様の陽くんだよ。私がおこに来るきっかけになった人なんだ」

古都香と陽は簡単に、幼い頃の現の出来事を説明した。

「なるほどな、それで人間のお前がおこに来られるようになったのか」

「うん、そうなんだって」

未だに古都香くつついたままだった紫苑が訊いてくる。

「古都香、その話を聞いてどう思ったの？」

「私は陽くんに感謝するだけだよ。だって陽くんがいなきゃ、ここにいなかったと思うから」

紫苑はじつと古都香を見つめる。

「どうしたの？」

「オレも古都香に会えて良かった」

「ありがとう、紫苑くん」

紫苑の艶やかな髪をそつと撫でる。まるで撫でられて気持ちよさそうな猫のように目を細めた。

二人を見ていた紫楓が声を掛けてくる。

「僕たち、これから買い物をして帰るんだけど、二人も一緒に夕飯どうかな？」

その提案すぐに乗ったのは陽だった。

「行きたいです！ ことちゃんはどうする？」

「私は……」

腕時計をちらりと見る。針は六時半を指していた。ここに来てからどれくらい時間が経ったのかはわからないけれど、陽すっかり話し込んでしまった気がする。

そんな古都香の様子を敏感に感じた陽が訊いてきた。

「現のことが心配？」

「うん、ちよつと心配かな。でもやつぱり皆と一緒にいたいし、一緒に行く！」

「つていうことだけど？」

と紫楓を見る陽。

「それじゃあ一緒にいこうか」

そうして五人は歩き始める、はずだった。

「紫鬼さん？」

紫鬼が立ち止まってある一点をじつと見つめている。彼は古都香には決して見せない厳しい目をしていた。

「どうし……んんっ」

声を掛けた古都香が咄嗟に口を手で封じられてしまう。やがて手を離れた紫鬼は、何事もないように歩き始める。

古都香は声を掛けてもいいものか悩んでから、小さな声で訊ねることにした。

「紫鬼さん、どうしたの？」

「ん？ ああいきなり悪かったな。変な視線を感じた気がしたんだよ」

「視線？」

その言葉に古都香も辺りを見回す。だが行き交う人々がいるだけでもわからなかった。

「あんまり気にするな。ほら、行くぞ」

紫鬼が古都香の手を引いていく。その紫鬼はいつもの紫鬼で、古都香はあまり気にしないようにした。

※ ※ ※

男にとってそれはとても簡単なことだった。

彼は牢にいる間、ずっと自分を偽り続けた。反省していると、もう復讐は諦めたと。何度も自警団の前で復唱した。だからだろうか、彼らは男の目的になかなか気づかなかつた。

男はそれでも念のため、真つ直ぐに目的地に行くことはなく街の中を歩き続けた。すると理由はわからなかったが、自警団の視線が自分から一瞬外れたことに気づいた。それをきっかけに男は全力で街を駆け抜けた。神と鬼が多い場所を選んで走ると、もう自警団が自分を追ってくることはなかった。

男は見つかる前に、とすぐに行動を開始した。神と鬼にはそれぞれ階級が存在する。その中でも上位の階級を持つ神や鬼は高級住宅街に住んでおり、とても裕福な生活をしている。男の目的はその中の一軒にあった。目的地の前に着くと、まずは玄関の引き戸を引いてみた。するとなんと不用心なことか、鍵はかかっておらず簡単に開いた。男はそのまま真つ直ぐに大きな部屋へと歩いて行く。しかしそこには誰もいなかった。次に隣の部屋を開ける。そこにも誰もいなかった。それを続けていると、ある一室から声が聞こえた。男はすぐにその部屋の扉を開けた。

そこにいたのは中年の男だった。そしてそれは男の目的の相手でもあった。中年の男はいきなりの訪問者か誰であるかをすぐに理解し、途端に怯えた表情になる。だがそんなことはどうでも良かった。

男は中年の男に向かって、勢いよく飛びついた。そのまま隠していた小刀で思い切り腹を指す。痛みを叫び悶える中年の男。しかしそれだけでは当然満足せず、小刀についた血を薙ぎ払うと、今度は胸へと突き刺した。それから何度も小刀で突き刺し、身体や喉を斬りつけた。ぐったりしても構わず斬り続ける。

やがて中年の男は髪の前から、指の前から、光となって消えて行った。小刀の血を近くにあつた紙で適当に拭うと懐にしまった。男についた大量の返り血も少しずつ溶けて消えていく。そして何事もなかったかのように玄関からその場を立ち去った。

すぐに近所の神が騒ぎ始めるのを、近くの家の屋根から見ている。だが男の心は決して愉快ではなかった。復讐をしようと考えていた相手を殺したというのに、全く晴れやかではなかった。それは神を殺したことの罪悪感から来るものではなく、まだもう一つ目的が残っているからだ。

男は騒ぎ立てる神の観察をそこそこに街へと戻っていった。その頃には彼についていた血は完全になくなっていた。堂々と街を歩いていると、なかなか見つからないと思っていたもう一人の目的の相手が奇跡的に見つかった。

彼はかつて自分と戦い、そして圧倒的な強さを見せつけられた相手だった。しかしそこで見つけた彼は、その面影が全くなく、その傍にはあの時いなかった女もいた。女と親しげに話す彼は、どこかに向かうその時こちらを見た。かなり距離があるため本当に見えているのかはわからないが、目が合った気がして男は咄嗟に身を潜める。しかしやはり見えていなかったようで、女に声を掛けて去っていった。

男はそんな彼を見て、気持ち下がるのを感じていた。あの時の、自分を圧倒的に負かした彼に勝ちたいと思いつけていたからだ。それなのに自分が牢に入っている間に、彼は腑抜けてしまった。どうにかして彼を本気にさせたい。

そう思った男は、あることを思いついた。

前半 了

※本作品の後半第5章〜第8章を含む全文は、以下に掲載されています。

pixiv みんなのシリーズ「桜色の夢」

<https://www.pixiv.net/series.php?id=925409>